

3rd INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON THE BI-DIGITAL O-RING TEST

第3回バイ・デジタル O リングテスト国際シンポジウム

Program & Abstracts

プログラム・アブストラクト

Oct. 3, 1997 1st & 2nd Meeting Room, International Conference Hall

Oct. 4-5, 1997 Ibuka Auditorium, Waseda University, Address Tokyo, Japan

1997 年 10 月 3 日 早稲田大学国際会議場 第一・第二会議室

1997 年 10 月 4 日・5 日 早稲田大学 井深大記念ホール

手をさしのべる O - リング医学

1997 年 9 月 5 日

元英王室ダイアナ妃の葬儀の中

世界を駆け巡ったマザーテレサの悲報

自分の側にいる病める人を一人一人救っていく

今正にマザーテレサの魂は神となる

マザーテレサの精神にふれ

1997 年 10 月 5 日

第3回バイ・デジタルO-リングテスト

国際シンポジウム成功の中

世界を駆け巡った大村教授の足跡

眼前の病める人に一人ずつ手をさしのべる

21 世紀、O - リング医学は文化となる

1997 年 10 月 下津浦康裕 日本バイ・デジタルO - リングテスト協会運営委員長

日本における第三回国際バイ・デジタルO - リングテストシンポジウム開催に際して

大村 恵昭, M.D., Sc.D., F.I.C.A.E. O - リングテスト協会会長 O - リングテスト創始者

序文

今回、日本における第三回国際バイ・デジタル O - リングテストシンポジウムを開催できますことを感謝します。これも、山村秀夫教授、武重千冬教授、渥美和彦教授、スウェーデンのノーデンストローム教授、ソニー名誉会長の井深大先生、林原生物化学研究所の林原健社長、フクダエムイー工業の福田均次会長、医道の日本社の戸部雄一郎社長、大頭仁教授、無敵剛介教授、早稲田大学総長奥島孝康教授他、多くの先輩や友人の直接、あるいは間接的支援があった賜物だ

と思います。私が創始、開発したO - リングテストも、当初考えていたより、その後私が発見した同一物質間の共鳴現象の臨床応用で、非常な進歩を遂げ、世界中に広がり始め、約40カ国で研究され、臨床応用されています。まだO - リングテストの初期段階だった1981年頃、北里研究所東洋医学部門の客員部長をしておられた故間中喜雄先生が「君がやってきた多くの研究がたとえ忘れ去られても、O - リングテストは21世紀の医学も超越して、超世紀的な進歩と革命を起こす未来医学の手段として、いつまでも使われ、後世へ不朽に残るであろう。」とおっしゃいましたが、今、この予言が現実味を帯びてきたような気がします。中国医学には「上夫治未病」という言葉があります。「優れた医者は、普通の医者や患者が気付く前、まだはっきりと症状の出していない初期の病気を発見し、治療してしまう。」あるいは、「病気になる恐れのある人を見つけて、未然に予防する。」といった意味ですが、O - リングテストの手技を正しく身につけると、誰でも名医なみの診断・治療が可能になります。各種臓器イメージング、癌組織のイメージング、癌遺伝子のイメージング、細菌・ウイルス・感染症のイメージングにより、前癌状態、早期癌、ウイルス感染を早期に発見し、治療することが可能になり、薬剤の適合性や、薬が病的局所に充分に入るかどうか、もし入らないとわかれば、薬剤の取り込みを強化する方法、臓器特異的に薬剤を取り込ませることや、薬の相乗効果、キャンセル効果を薬剤の服用前に、正確に予測することが可能になりました。また、病的局所への重金属の沈着と抗ウイルス剤や抗菌作用のある薬や抑制剤の発見や、その体外排泄法や電磁場など環境の影響も測定可能になりました。又、O - リングテストを使ってマップした正確な臓器代表領域を刺激すると、今でも十分に薬の入らなかった所へ、選択的に薬が病巣部へ到達させる事が可能になりました。こうしてO - リングテストは、多くの癌も含めた難病の診断や治療には驚くべき結果が得られるため、不可欠な手段になりつつあります。多くの医者が、正しいO - リングテストの手法を身につけることにより、無駄な医療費を節約でき、また、患者への身体的、経済的苦痛を最小限に抑え、各国の高齢社会による医療費の急激な増加も抑制することが可能ですし、生化学的検査の結果がでるより、はるかに早く異常を発見し、治療を行うことが可能です。更に将来の医学は、各個人の特有の病気に相当する個人に適したその個人特有の治療法を行なわなければならない。そのためにO - リングテストは最も重要な手段になると考えられます。又、東洋医学では、目に見えない経絡やツボや臓器代表領域を正確に局在させる事が出来るだけでなく、O - リングテストによる研究の結果、外気功も効果的に気功のエネルギーを紙、その他の物に(+)と(-)のペアとして蓄える事も1989年から出来るようになり、この紙の(+)の部分に患者の病巣部に患者自身があてる事により痛みを減らしたり、循環をよくしたり、薬を選択的に入りやすくしたりする事にすでに成功し、有効的な漢方薬の選択には欠かすことの出来ない手段となります。O - リングテストも、医学部会、東洋医学部会、歯学部会、獣医学部会、他各分野で、皆さんの研究、臨床体験で、いろいろな可能性がでてきましたし、21世紀の医学として発展させるために、皆さんの有意義な情報交換と新たな発見と出会いの場になるような場として、国際シンポジウムが成功するように思っています。皆様がふるって、貴重な体験を発表され、盛会となりますように、協力される事をお願い申し上げます。

ご挨拶

日本における第3回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウム開催に寄せて

第3回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウム会長 **山村 秀夫** 東京大学医学部
名誉教授

東京で開催される第3回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウムに皆様方をお迎えできますことは、私にとって非常に楽しみであるとともに非常に光栄なことです。過去に東京で開催された2回の国際シンポジウムは盛況で非常に成功裏に終わりました。

バイ・デジタルO - リングテストを臨床応用することで、さまざまな病気の診断が可能になったばかりでなく、治療も可能になりました。この国際会議の目的は、参加される方々にバイ・デジタルO - リングテストの基礎研究および臨床の分野における最新のトピックスを提供することにあります。こうして皆様方の体験を交換しあい、この分野における知識を新たにしていたいただければ幸いです。

私は、皆様方がこのプログラムに目を通され、非常に関心を持たれ、刺激をうけられることと確信しています。

この国際会議のもう一つの目的は、世界中のO - リングテストを研究する仲間と親交を深めることにあります。

私は、東京滞在が皆様方にとって非常に楽しみであり、快適で、実り多いものとなるように懇願いたします。

第3回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウムに寄せて

平成9年9月26日

日本バイ・デジタルO - リングテスト協会名誉会長ソニー株式会社ファウンダー 井深 大

皆さん、こんにちは。本日も盛大に第3回国際バイ・デジタルO - リングテストシンポジウムが開催される運びとなりましたことを、バイ・デジタルO - リングテストを応援する者の一人として、心よりお慶び申し上げます。

バイ・デジタルO - リングテストと私の最初の出会いは、今から8年程前になりますでしょうか、大村先生と下津浦先生が、縁あって診断してくださいまして、その場で大きな何かが湧き上がるのを感じました。その何かはその後も消えるどころから膨らみ続け、バイ・デジタルO - リングテストは、今では私の最大の関心事の一つとなっております。「科学万能主義」と言われる現在、人々の言葉の危うさに気がつきはじめています。近代科学は、確かに人類の物質的側面、つまりは豊かさ、便利さに大きく寄与してきましたが、精神的側面に寄与できたかという疑問符をつけざるを得ません。これは量れるもの(測定できるもの)、言葉で表せるもの、再現性のとれるものに対象を限定したことに大きな原因があるのではないのでしょうか。振り返りますと、近代科学はデカルトの提唱した「心身二元論」「要素還元主義」の名の元に「心」を排し、対象を部分にどんどん細分化していました。そして、部分は極めて精密に表現できるようになりました。しかし、部分にしてしまっただけでは、いくら集めても、全部にはなっても全体にはなりません。そして、「心」はそこから生まれようがありません。科学が次世代に確実に伝承できるというメリットを持ちながらも行き詰まりつつある、そして皆がも不満を感じているのかも、このポイントに帰着するのではないのでしょうか。西洋医学もまさに同じ問題点を抱えています。悪いところがあれば、切れば良い、取れば良い、そして大量の投薬。人間は機械ではありません。全体システムとして、しかも「心」を持ち、外界と交流するシステムとして人間を捉えなければ、真の医学には成りえないと思います。21世紀を目前に控え、我々にはパラダイムシフトが必要なのです。バイ・デジタルO - リングテストはその可能性を見せてくれています。測定器を人間に求めた発想の転換、しかもそこから出てくる情報の数々は、最新の科学装置でさえ、掴まえることができません。また、「心」や「気」の作用があることを含め、多くの事物が相互に関係しあっていることも、バイ・デジタルO - リングテストは教えてくれます。我々は、科学の所産である機械に頼りすぎ、大事なものを見落としていたのです。5年前、大村先生のバイ・デジタルO - リングテスト特許が米国特許庁で認可されました。画期的なことだと思います。しかし、それは決して平坦な道のりではありませんでした。人間を直接対象とした特許など、未だか

つてなかったからです。1985年に最初の申請をされ拒絶。1987年の2度目の申請も拒絶。1990年に3度目の申請をされ、数多くの診断例・治療例も提出され、1993年2月23日、遂に認可に至ったのです。まさに7年半という歳月をかけての金字塔でした。大村先生の革新的なアイデアと関係者皆様の長年の御苦労が、社会や制度を動かしたのです。世の中は確実に新しい時代に向かいつつあります。我々も、既存の尺度でなく、広く大きく「心」や「気」の問題を論じていかなければなりません。バイ・デジタルO - リングテストがその大きな一翼になってくれることを願ってやみません。本当に不思議な御縁で第3回バイ・デジタルO - リングテストの国際会議が大村先生と私の卒業した理工学部のある早稲田大学で再び開催されますが、バイ・デジタルO - リングテストが、そしてバイ・デジタルO - リングテストが、そしてバイ・デジタルO - リングテスト協会が新しい大きな第一歩を示されんことを切に祈念いたします。

第3回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウムの開会に寄せて

日本バイ・デジタルO - リングテスト協会名誉会員 林原 健 (株)林原生物化学研究所社長

ソニーの創業者であられる井深 大様を協会の名誉会長に頂き今日まで温かい御助力を賜り、また大村先生の昼夜を惜しまぬ、血のにじむような研究一筋にかけてこられた御努力の結晶とそれを支えてこられた会員の皆様方の熱意に対し、心より敬意を表すと共に、本日の第3回目の『バイ・デジタル O - リングテスト 国際シンポジウム』が成功裡に終わる様、心より願っています。この大村先生が開発された技術が21世紀において医学の分野以外においても最も重要な技術の一つに成長することを私自身心より確信しています。そのためにもあらゆる分野の人達の協力と、協会自身がそれを受け入れる広い大きな心がこれから最も重要となります。今後とも皆様方の協会に対しての惜しみない御協力と御指導を心より期待し、また御願いを申し上げ、御挨拶に代えさせていただきます。重ねて今回の国際シンポジウムが会員の皆様にとっても実り多い会議になりますこと、心より願っています。

第3回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウムの開会に寄せて

衆議院議員 山本 有二

私は、O - リングテストによって、幸せな今日があると確信しています。そもそもの出会いは、12年前、仕事の無理がたたって、お腹をこわしました。突然、近くの病院に出向いたところ、大村恵昭先生を知るところとなったのであります。以後、来日の度にお目にかかり、たとえ10分でもお時間をいただけるなら、いつもお会いして体調についてのアドバイスをもらっております。そして、その都度、先生が医学会での御自身の夢を語られるので、段々と先生のパワー、先生の偉大さに魅せられてきたのであります。私は政治の場で、その先生が発案されたノーベル賞にも匹敵するO - リングテストを、しっかりと確立して行きたいと考えております。

21世紀はO - リングテストの時代

衆議院議員 鳩山 由紀夫；妻 幸

常々私は「21世紀はO - リングテストの時代」ではないかと感じております。人間が輪廻転生を繰り返すという一つの考え方をいたすときに、私達のエネルギーが過去から永劫の未来に続く中で、DNAの中に、あるいは潜在意識として蓄積されている知識の量は測り知れません。しかし、現在この地球上に生かされている私達肉体を有するものは、その肉体を通じて得られるおびただしい情報量によって、ややもするとそこからの知識が全てであるように錯覚をしているように思います。O - リングテストとは、その潜在意識に問いかけ、肉体を通して真の自分と話し合う一つのテクニックではないかと理解をいたしております。世界においては大村先生を中心に、

日本においては下津浦先生を始めとする先生方が多くの患者さんに毎日愛を捧げていただきながら、O - リングテストを通してコミュニケーションをして下さっています。それは単に病気を癒すということに止まらず、心をも癒すということだと思えます。

第3回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウムの開会に寄せて

衆議院議員古賀 一成

各国、各界の錚々たる知性が集い、第3回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウムが盛大に開催されますこと、心よりお慶び申し上げます。5年前、難病に挑戦する新たな医学に関心をもつ政治家と科学技術庁等の政府関係者が参加し、大村恵昭教授と下津浦先生の講演を拝聴したのが、初めての出会いでした。誰しもが、O - リングテストが示唆する“人間に潜在する不思議な力”“気の力”ともいふべきものに驚き、これは財政問題を背負いながら超高齢化社会を迎える我が国にとって極めて重要な研究テーマを感じたところです。本シンポジウムが、更に深く広い情報交換の場となり、それがひいては21世紀へ向けての医学の世界に新たなパラダイムを創造する契機となることを願ってやみません。今、世界は物質文明から心、愛、即ち「友愛」の大切さに気付き始めました。亡くなったマザー・テレサさんがかつて長崎に来られたときに、「世界には2つの地域が飢えに苦しんでいる。それはアフリカと日本である。日本は精神が飢えている。」と話されました。だからこそ、日本の大村先生が生んだO - リングテストがますます普及し、21世紀には世界中の心を癒す懸け橋になっていただきたいのです。今後の諸先生方のさらなるご活躍を心よりご期待申し上げます。O - リングテストのおかげで、母も、息子も、友人達も元気に暮らしておりますことに感謝の気持ちを表しながら。

3rd INTERNATIONAL

SYMPOSIUM

ON

THE BI-DIGITAL O-RING TEST

SATURDAY Oct.4 - SUNDAY Oct.5, 1997

IBUKA AUDITORIUM INTERNATIONAL CONFERENCE HALL, WASEDA UNIVERSITY

1 - 104, TOTSUKA, SHINJYUKU-KU, TOKYO, JAPAN

ORGANIZED BY:

THE JAPAN BI-DIGITAL O-RING TEST ASSOCIATION

JOINTLY SPONSORED BY:

INTERNATIONAL COLLEGE OF ACUPUNCTURE & ELECTRO-THERAPEUTICS

3rd International Symposium On The Bi-Digital O-Ring Test

Oct.4 - 5, 1997

IBUKA AUDITORIUM , WASEDA UNIVERSITY

Totsuka, Shinjyuku-ku, Tokyo, Japan

Organized by: The Japan Bi-Digital O-Ring Test Association

Co-Sponsored by: The International College of Acupuncture & Electro-Therapeutics, U.S.A. The Japan Bi-Digital O-Ring Test Association & The Japan Bi-Digital O-Ring Test Medical Society;

President: Yoshiaki Omura, M.D., Sc.D., F.A.C.A., F.I.C.A.E. Director of Medical Research, Heart Disease Research Foundation, New York; President, International College of Acupuncture & Electro-Therapeutics, New York; Professor, Dept. of Non-Orthodox Medicine, Ukrainian National Medical University (Former Kiev Medical University); Visiting Research Professor, Dept. of Electrical Engineering, Manhattan College, New York; Editor in Chief, Acupuncture & Electro-therapeutics Research, The International Journal, New York; Former Adjunct Professor, Dept. of Pharmacology, University of Health Sciences, Chicago Medical School; Former Senior Scientist, INSERM, France and Former Visiting Professor, Dept. of Psycho-physiology, University of Paris V, France

Executive Director: Yasuhiro Shimotsuura, M.D., F.I.C.A.E. Executive Director, Japan Bi-Digital O-Ring Test Association; Former Director of Medicine, St. Maria Hospital, Kurume, Japan; Corresponding Editor, Acupuncture & Electro- Therapeutics Research, The International Journal

Honorary president: Masaru Ibuka, Founder of Sony Corp.

Honor member : Ken Hayashibara, President, Hayashibara Biochemical Laboratory

SYMPOSIUM CHAIRMAN AND CO-CHAIRMAN

Symposium Chairman: Hideo Yamamura, M.D., Ph.D., F.I.C.A.E. Prof. Emeritus, School of Medicine, Tokyo University; President, All Japanese Acupuncture Associations; Former Dean, School of Medicine, Tokyo University; Former Chairman, Dept. of Anesthesiology, School of Medicine, Tokyo University; Editorial Board Member, Acupuncture & Electro-Therapeutics Research, The International Journal

Symposium Co-Chairman: Chifuyu Takeshige, M.D., Ph.D., F.I.C.A.E. Prof. Emeritus, Showa University School of Medicine; President, Showa University School of Medicine; Former Dean, Showa University School of Medicine; Former Chairman, 1st Physiology Dept., Showa University School of Medicine; Editorial Board Member, Acupuncture & Electro- Therapeutics Research, The International Journal

Symposium Co-Chairman: Hitoshi Ohzu, Dr. Techn. Prof. Dept. of Applied Physics and Former Dean, Graduate School of Science and Engineering, Waseda University, Tokyo, Japan

International Symposium Organizing Committee Chairman: Yasuhiro Shimotsuura, M.D., F.I.C.A.E.

B D O R T の生理学的背景

—松果体関与の作業仮説—

武重千冬, M.D., Ph.D., F.I.C.A.E. 昭和大学学長, 東京

Bi-Digital O-Ring Test (BDORT)は、O - リングをつくる指の筋の随意運動にあずかる筋の緊張度の変化を指標としているが、この緊張度の変化は、意志に関係なく起こるのでBDORTが診断に使われることになる。筋の緊張は、筋紡錘体からは筋長によって求心性衝撃が現れ、筋紡錘体に付着する筋を支配する γ 運動ニューロン系によって調節されている。脳幹から γ 系に対する下行性神経の活動の変化によって運動を引き起こす α ニューロンに対する筋紡錘体からの求心性衝撃に多寡が現れ、筋緊張は調節される。この下行性神経はセロトニンによって活動する。一方BDORTは、臓器代表点、病変臓器、薬物の適否など様々な現象を検出している。検出が可能なのは、体内の検索すべき物質からの情報と、体内のそれに対応する物質からの情報とが一致している時に活動するセンサー、すなわち、これらの物質からの情報で共鳴、共振するセンサーを必要とする。BDORTは光の影響に強くうけ、閉眼時にはBDORTは現れなくなり検査不能となる。眼から入る光に反応するのは網膜と松果体である。松果体は地磁気や外気功に反応し、松果体細胞の自発性電気活動はこれらによって抑制される。松果体に存在するセロトニンをN - アセチルセロトニンに転化する酵素(NAT)の活性は磁気によって抑制されるので、これらによりセロトニンの増量が起こり、これは脳波の変化となって現れる。同様の脳波の変化は外気功によっても起こるので、外気功も同様にNAT酵素を抑制すると考えられる。松果体には磁気には応じないが光に反応する細胞がある。BDORTの反応は閉眼時には現れないので、もしこの細胞がBDORTの共鳴にも応じ、これらが磁気と同様にNAT酵素活性を抑制するとすれば、セロトニンの量に変化が現れ、指の筋緊張に影響する事になる。この細胞は光の下で共鳴に応ずるので、光の存在下でのみBDORTが可能となる。家兎の運動領を刺激して屈筋を活動させて、これを筋電図で記録し、人工的に胃潰瘍を発生させた時の臓器反応点は、この筋電図を抑制する皮膚の刺激部位として検出出来たので、動物実験からもBDORTの存在を確認出来た。また、この筋運動は脳幹部の電気刺激でも抑制された。しかしこの反応に松果体が関与するか否かを検索するのは実験上複雑となるので、ヒトの松果体腫瘍の患者のBDORTの存否から、BDORTに対する松果体の関係を検索した。肺の腫瘍が松果体に転移した患者では胸腺の臓器反応点に対するBDORTや、また間接法によって、肺や松果体の罹患部位の臓器反応点をあらかじめ調べておいて、これらの部位についてBDORTを行っても、異常を示すBDORTにおける反応は見られなかった。

Study on the Basic Neurophysiological Mechanisms of the Bi-Digital O-Ring Test

Victor Lysenyuk, M.D., S c .D., F.I.C.A.E. Chairman , Dept. of Non-Orthodox Medicine, National Medical University, Kiev, Ukraine

Abstract

The Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) is spreading in the different fields of medicine gradually. The main advantage of BDORT is its high efficiency and affordability. The most important aspects of the BDORT application are : 1)localizing abnormal parts of the body; 2) identifying the cause of pathology; 3) evaluating food and drug compatibility; 4) estimating the therapeutic effects of any treatment; 5) detecting acupoints and meridians, organ representation area. The details how BDORT works are not completely investigated, but many experiments have shown that its basic mechanism includes the muscle force changes through a brain response on the characteristic electro-magnetic signals. The gigantocellular nucleus of reticular formation plays a central role in the realization of BDORT. This nucleus mediates postural and vestibular reflexes , extensor and flexor muscle tone. Stimulation of the gigantocellular effector zone in the medullary reticular formation tends to inhibit somatomotor activity. Stimulation of the gigantocellular effector zone in the pontine reticular formation and in the mesencephalic reticular nuclei facilitates somatomotor activity.

To examine the reactions of the neuromuscular system during BDORT, we conducted an electromyographic investigation of H(Hoffmann)- reflex according to the standard technique. As is

commonly-known, H-reflex is very sensitive to any supraspinal influence and can be considered as an important model for the study of central and peripheral neurophysiological mechanisms in humans. The dynamics of the spinal motoneuron's excitability was examined during the weakening and strengthening responses of BDORT. Statistically significant difference in the testing H-reflex values was found for those conditions. The weakening response of BDORT was accompanied with the H-reflex decrease. The H-reflex increase correspond to the strengthening response while performing BDORT. The direct method of BDORT showed more dynamics than the indirect one. But the latter gave more stable values of the testing H-reflex. On the next stage, the relationship between degrees of opening with the testing H-reflex was investigated. We could not find statistically significant difference for degrees of the weakening response (opening). The possible explanation could be in the pronounced individual variations of the testing H-reflex values. On the contrary, the strengthening response of BDORT showed rather clear correspondence for different degrees of not opening with the testing H-reflex. The dynamics of the spinal motoneurons' excitability observed in our experiments can be explained by supraspinal influence mostly of the gigantocellular nucleus of reticular formation. Repeated basic experiments using the described approach are important for developing the neurophysiological bases of BDORT.

The Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) is spreading in the different fields of medicine gradually. The main advantage of BDORT is its high efficiency and affordability. The most important aspects of the BDORT application are 1) localizing abnormal parts of the body; 2) identifying the cause of the pathology; 3) evaluating food and drug compatibility; 4) estimating the therapeutic effects of any treatment; 5) detecting acupoints and meridians, organ representation areas. As reported by Prof. Omura, Y., more than 10 years ago, the gigantocellular nucleus of reticular formation plays a central role in the realization of BDORT. This nucleus mediate postural and vestibular reflexes, extensor and flex muscle tone. Stimulation of the gigantocellular zone in the medullary reticular formation tends to inhibit somatomotor activity.

Straight Lines or Ribbons of the Impairment Found on the Body with the Bi-Digital O-Ring Test. Their Origin, How to avoid them.

Andre De Smul, M.D., F.I.C.A.E. Prof. Emeritus of Department of Surgery; Vrije (Free) University of Brussels Belgium

Abstract

Examinations of patients with the Bi-Digital O-Ring Test originally developed by Prof. Omura, Y. of New York, can show straight impairment lines or ribbons that raise a lot of questions. They are due to long time exposure to standing waves of low intensity electro-magnetic fields, day after day on the same place, mostly in the bedroom. These electro-magnetic waves and fields are in the cm or mm range and induce resonance and uptake phenomena in our body.

We can distinguish carrier waves and carried waves. - carrier waves have mostly both polarities and compaise

- orthogonal and diagonal networks all over the earth
- water veins, superficial or deep
- faults in the earth
- electric power lines
- radar, herz cables
- othersources of electro-magnetic waves

- carried waves have mostly imbalanced polarities

their specific wavelength is in resonance with organs or tissues, so that they can be very harmful good influences can also be observed (sacred places)

Our civilization creates a tremendous overload of electro-magnetic fields, polluting the natural networks (radar, radio, TV, satellites, cellular phones, microwave devices). All these influences can be brought to our bed where we take them up for several hours day after day. As a result of the uptake, tracks of impairment are found on the body. The tracks on the body can be found on the bed and in the house, and outside the house. Detection is possible with the Bi-Digital O-Ring Test, very expensive electronic devices can be used, but on the field trained people obtain very good results with lecher antenna. This simple device allows wavelength tuning and intensity estimation. Affordable electronic devices able to meet these parameters (cm and mm waves with low intensities are still to be made). Prevention is possible to some extent (diverting antennas, flames, absorbers). In the future building houses should core with lowering electro-magnetic overload and the abuse of cm and mm (GHz) waves must be reduced.

バイ・デジタル ORT テスタの開発とその臨床応用—エアシステムを用いた ORT の自動化装置—

下津浦康裕,M.D.,F.I.C.A.E.*、大村恵昭,M.D.,Sc.D.,F.I.C.A.E.**、大竹秀喜***、仁尾理****、横大路光則****、花田道雄****、前澤宏之**** *下津浦内科医院院長、ORT 生命科学研究所**ニューヨーク心臓病研究 Foundation *** (株) 三洋産業 **** (株) 安川電機

目的：エアシステムを用いた ORT の自動化装置バイ・デジタル ORT テスタ (ORT テスタ) の開発と ORT テスタの臨床への応用

対象：症例 1 (健康、46 歳男性) 症例 2 (上腹部痛、25 歳男性)、症例 3 (腰痛 46 歳女性)、症例 4 (右橈骨神経損傷、62 歳女性)、症例 5 (過換気症候群、12 歳女性)、症例 6 (パーキンソン症候群、68 歳男性)、症例 7 (大腸癌全身転移、68 歳女性) の 7 例を対象とした。ORT テスタを用い、症例 1 は、人の電磁波感受性について検討し、症例 2~6 は、直接法で異常部検出、薬剤適合性テストにつき検討した。症例 7 は間接法でオンコジン C-fosAb2 のイメージングを行った。結果：1.健康、46 歳男性の指先から蛍光灯までの距離を 2m から接触するまで検討したところ、蛍光灯に近づくにつれ筋力低下は大となった。2.上腹部痛、25 歳男性の腹部で 5 箇所測定を行ったところ、臍上部にコントロールの 80%まで筋力低下するところがみられた。薬剤適合性テストでは、ザンタック (87%)、マーロックス (95%)、安中散 (112%)、小柴胡湯 (116%) と現代薬より漢方薬に感受性が高かった。3.上腹部痛 (症例 2)、腰痛 (症例 3) の痛みのある患者では病巣部で著明な筋力低下がみられた。右橈骨神経損傷 (症例 4) の患者では有意な筋力低下はみられなかった。4. 過換気症候群 (症例 5) とパーキンソン症候群 (症例 6) の頭部の異常部では著明な筋力低下がみられた。5. 症例 7 にオンコジン C-fosAb2 で筋力低下のみられる部位と ORT イメージング像は一致する傾向にあった。しかし、ORT イメージング像で描けた部位でも ORT テスタで有意な筋力低下のみられない部位存在した。

考察：ORT テスタを実際の患者に使ってみた。異常部検出、薬剤適合性テスト、共鳴現象によるイメージングと本装置は、種々の ORT 診察に応用出来ると考えられた。しかし、検査による ORT と ORT テスタによる ORT の差異については、今後更に詳細に検討が必要である。

〒830 福岡県久留米市東町 496 TEL 0942-36-0620

獣医学における Bi-Digital O-Ring Test の試用牽引機 (Mk-II) による実験研究

松原利光,B.S.,D.V.M.,Ph.D. 麻布大学獣医学部獣医内科第一講座助教授

第二回 Bi-Digital O-Ring Test 国際シンポジウム（東京会議）において試用牽引機（Mk-I）の実験成績に関して報告をした。その概要は、牽引スピード量を主体的に変動させ、その変化率が各々の指で構成される O-Ring にたいして顕著に推計的な有意差を認めた。今回は、重点的に改良した新牽引機（Mk-II）を作製し、牽引力を主体とした変化に注目した。すなわち、Mk-II に Dial Indicator を設定し、これの可変変動によって O-Ring を構成している力量が正しく一定の変化率として記録表示された。本装置は牽引機（Mk-II）、増幅機 WG1-300A、記録機 WR-7200 からなっており、Mk-II の特徴は第 3 者の構成される O-Ring の力量と Mk-II の牽引力が平衡一致したときに牽引静止状態（停止）となる機構をもっている。

実験条件及び成績： Mk-II のキャリブレーション

第 3 者の Bi-Digital O-Ring Test 条件

実験環境の電磁波及びシールド

第 3 者における O-Ring 構成には I-II の指を応用した、Dial Indicator の回転軸を 0 から 100 に刻み随時、軸を可動すると Mk-II の O 型環が中心部より左右同速度、同力量で開放する。

結果：

Mk-II Dial Indicator (N=15)

kgf D.I.	55	60	65	70
X	2.21	4.29	6.88	9.89
±	±	±	±	±
2・SE	0.174	0.481	1.020	0.519

□ * 記録機 WR-7200 方眼目盛（0-10kgf）

Mk-II Dial Indicator 55-60 目盛の範囲では、O-Ring が閉じて静止状態を維持、65-100 目盛の範囲では、随時 O-Ring の力量に対応し、静止および開放状態が繰り返し替えた。

〒229 神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71 TEL.0427-54-7111 FAX.0427-53-3395

病巣の情報が集積・保持されている頭部領域の研究

○矢野平一¹⁾、³⁾、鮎澤聡²⁾、下津浦康裕⁴⁾

1)東京慈恵会医科大学付属柏病院総合内科、2)筑波大学臨床医学系脳神経外科、3)会田記念病院、4)下津浦内科

要 約

〔目的〕昨年の本学会で肺癌、脳腫瘍症例の CT/MRI フィルム上にて病巣と同様の共鳴反応が脳室腔などの髄液に認められ、また頭頂部に同様の反応を呈する領域があることを発表した。今回この領域(仮称：髄液代表領域 Cerebrospinal Fluid Representing Area ; CSF-RA)に興味深い特徴があることを発見したので報告する。〔対象および方法〕呼吸器疾患、神経疾患を中心とした

計 25 例 (男性 10、女性 15、年齢 20-87 歳)を対象として Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) を間接法で行った。水泳帽を装着した患者の頭皮上で -4 を基準に同領域のイメージングを行い、位置を計測後に病巣との比較検討を行った (BDORT は会田記念病院にて施行)。[結果] (1) a) CSF-RA は頭頂部(前後に長い楕円形)と後頭部(ほぼ円形)の 2 カ所に矢状線を挟んで一対ずつ認められた。b) CSF-RA は頭頂部では全例に認められ、後頭部では 1 例を除き全例に認められた。c)頭頂部の CSF-RA : 鼻根部 ~ 中心までの距離 13.8 ~ 17.5 (平均 15.6) cm、左右の中心間 2.0 ~ 4.7 (平均 3.0) cm。d)後頭部の CSF-RA : 後頭結節 ~ 中心 4.9 ~ 10.5 (平均 6.9) cm、左右の中心間 2.0 ~ 4.4 (平均 3.0) cm。(2)各種共鳴サンプルのうち髄液、乳酸 Ringer 液、病巣体表で陽性のサンプルと強く共鳴し、一部の症例では膀胱、胸腺、肺と共鳴した。(3)伝導体にて連結した病巣と強い共鳴反応を呈した。(4)適薬投与による共鳴反応の減弱/消失は前腕筋腹、病巣の体表/臓器代表点、CSF-RA の順で CSF-RA で最も遷延した。(5)右指での CSF-RA の短時間マッサージで病巣の薬剤取り込みが増強した。[考察]今回発表した CSF-RA は髄液と強く共鳴することが確認され、病巣で得られた病的反応は CSF-RA においてすべて認められた。これらは生体の情報が髄液を介して集積・伝達されている可能性を示唆するものである。また CSF-RA には病巣の情報が遷延して保持されるという性質があり、病巣の体表/臓器代表点での共鳴反応が適切な治療にて原疾患の治癒前に減弱/消失した場合でも異常が検出されるため、診断/治療上のミスを防ぐ上で有用である。

〒277 千葉県柏市柏下 163-1

頭頂後部の菱形部分での病気の評価

近藤良,M.D. モービル石油 (株) 医務部

或る病気の情報が頭頂部の菱形部分に出る事が多いと言う事が、Prof. Omura, Y., New York によって発見されたバイ・デジタル O - リングテスト (O R T) を使う事によりわかって来た。これにより或る病名の経過観察にも便利で、その消長から治癒に至るまでを克明にフォローすることができる場合が多い。

< 方法 > 手術用ディスポーザブルキャップ「クリーンキャップ M」(井内盛栄堂 03-3249-2070) を患者の頭に被せ、このキャップの上で頭頂部の正中で大泉門に相当する部位よりやや前にある一辺が約 1.5cm の菱形を探す (大きさと形は人によりやや異なる)。健常者は、この菱形の返上でのみ O R T が開く (菱形内で開く箇所があれば、それは異常の存在を意味する)。まず四つの頂点を探し、それぞれ隣り合う頂点の midpoint で O R T が開くことを確認する。このようにして菱形が描けたら、菱形内を通常の O R T で (適合反応および共鳴現象) スキャンすることにより、異常の範囲と病原体の種類、重金属、腫瘍マーカー、神経伝達物質、ホルモン、薬剤の病巣取り込み、等々を診断することができる。次に、O R T 適合反応を用いてこの菱形内の個々の問題すべてに対して有効な処方決定する。このようにして、取りこぼしのない治療ができる。再診時は、同じキャップを被せ、まずこの菱形の位置決めをした後、問題点の消長と処方の検討を行う。キャップがカルテともなる。このようにして治療を進め、それぞれの問題が縮小、消失、菱形内がブランクとなるよう治癒を目指す。

< 結果と考察 > 難病となると、10 種類近い病原体が上述の頭頂部菱形内を埋め尽くすことも稀ではない。また、2 種以上の病原体が重なり、重金属や腫瘍マーカーなども伴って複雑な様相を呈することもある。このような場合、10 種類の病原体のうち 9 種類に有効な処方であっても 1 種類に無効であると菌交代が起きてしまう。すべての問題に対して有効な薬剤を処方し、その病巣取り込みを確実にすることが大切である。そのためにはできるだけ短い間隔でフォローし、薬剤の病巣取り込みを確認しながら常に処方の軌道修正をしていくことが必要となる。いくつかの症例を供覧する。

バイ・デジタルO - リングテストを応用したクラミジア感染症の治療

原田一哉,M.D.,Ph.D.¹⁾, 横内正典,M.D.²⁾, 岩永明美²⁾, 吉田佳子,Pharm.²⁾, 丸山修寛,M.D.,Ph.D.³⁾, 本田龍三,M.D.⁴⁾, 鹿島春来⁵⁾, 楊孝康,M.D.⁶⁾ 小山市バイ・デジタルO - リングテスト医学研究会 & 神鳥谷クリニック¹⁾、東京都O - リングテスト医学研究会 & 横内醫院²⁾、仙台市O - リングテスト医学研究会 & 徳州会病院³⁾、札幌市O - リングテスト医学研究会 & 牧田病院⁴⁾、松山市東洋医学O - リングテスト研究会⁵⁾、北海道O - リングテスト医学研究会 & 穂別町立病院⁶⁾

我々はニューヨークの Prof. Omura,Y.により創始開発されたバイ・デジタルOーリングテストを使った研究について、前回のバイ・デジタルO - リングテスト医学会において、C .トラコマティス感染は性行為による水平感染と母子感染による垂直感染とにより、かなり広範囲に拡がっていること、さらにC .トラコマティスは癌を含むさまざまな疾患や痛みの部位に存在し、その発症の引き金になっていたり、増悪因子になっていることを報告した。しかし、C .トラコマティスに対する治療は非常に困難であり、通常の化学療法では症状を軽減できても、BDORTで消失を確認するまでにはなかなか到達しない。これに対して我々は以下に示す様々な工夫を試み、治療成績を向上させることが可能になったので紹介する。

A . 基本的治療...薬剤の種類は BDORT により決定する

1) 抗菌剤の投与 ニューキノロン剤(クラビット^R、スパラ^R)、クラリス^Rミノマイシン、ビブラマイシン、エリスロマイシンなど

2) 漢方薬の投与 桂枝茯苓丸、竜胆瀉肝湯、釣藤散など

B . 特殊治療

1) 体内環境の改善

a . 高エネルギー水の飲用...水の選択は BDORT による

「回春仙水」(酸化還元電位 ?200mV)

「夢水」 (酸化還元電位 ?400 ~ -1000mV)

b . 有害食物をできるだけ避ける

c . 体内重金属の排泄促進

2) 生活環境の改善

a . 電磁波対策

b . 就眠中の頭の方向

3) 経穴、経絡治療・・・刺激として気功布や波動チップを用いる

a . 胸腺体表反応点「華蓋」への刺激

b . 特殊穴

c . 耳穴

以上の治療法のうち、高エネルギー水の飲用及び経穴・経絡に対する気功治療 C . トラコマティスの共鳴を即時的に消失させる効果が得られた。

〒323 栃木県小山市神鳥谷 1 — 1 9 — 1 . 0285(22)7700 FAX . 0285(22)6636

使用すべき薬の用量について

広部千恵子 , Ph.D. 人間科学課程教授 , 清泉女子大学

ニューヨークの Prof. Omura, Y.によって創始されたバイ・デジタル O-リングテストは使用する薬剤を決める為だけではなく、その量を決定する為にも有効な手段である。この一例として本大学の職員の乳腺の腫瘍に対する林原製のプロポリスの量を O-リングテストで追いかけてみた。Aさんは25才の女性で、彼女の右乳房に小さな腫瘍反応が O-リングテストで発見された。当時彼女はプロポリス 0 . 3 5 g を服用していた。ところがこの時は丁度月経の終了直後であった。排卵期になるに従い、腫瘍の異常は拡大し、プロポリスの量も 0 . 3 5 g から 0 . 7 g、ついには 1 g にまで増加していった。この事実から婦人特有の器官の異常を診察する時には少なくとも一週間に一度位は量のチェックをした方がよいことが分かる。また、プロポリスが体内で効力を保っている時間帯も女性の性周期と関係してくるようである。通常彼女が午前 7 時にプロポリスを服用すると、午後 4 時から 5 時まで効力があつたが、排卵期前後では午後 1 ~ 2 時までしか効力がなかった。以上のことから、医者は患者に O-リングによる診断を行う時は少なくとも診察当日は何も服用しないで来るように忠告する必要がある。また女性の患者の時には、特に女性特有の器官を診察する時には十分な注意が必要なことが分かる。

〒141 東京都品川区東五反田 3 - 1 6 - 2 1 TEL : 03-3447-5551 FAX : 03-3447-5493

The Bi-Digital O-Ring Test in a Surgical Department for Outpatients

Andre De Smul,M.D., F.I.C.A.E. Prof. Emeritus of Department of Surgery ; Vrije (Free) University of Brussels Belgium

Abstract

For several years the Bi-Digital O-Ring Test has been used in this department of our University Hospital.

This test proved to have many advantages on other Kinesiologic examinations by its ability to quantify the intensity of a response.

The main uses were:

- In the field of diagnosis:
- screening of organ representation points
- organ mapping
- determination of germs involved in local infections

-localization and confirmation of electromagnetic-field-induced abnormal parts of the body

-In the field of treatment:

-selection of most effective antibiotics resulting in no allergy or intolerance

-selection of optimal N.S.A.I.D. (non steroidal anti-inflammatory drugs) and other drugs in order to avoid side-effects (stomach ulcers, allergy or intolerance)

The Nurses in this department were also trained to use the Bi-Digital O-Ring Test (originally developed by Prof. Omura, Y.) for patients mentioning previous allergy or intolerance to products used in surgical dressings:

-cleaning and disinfection solutions

-ointments

-tapes and bandages

For very old, very impaired or non collaborating patients an intermediate test person was used.

In these applications the Bi-Digital O-Ring Test proved to be a quick and accurate non-invasive method, without any expense.

The principles of the Bi-Digital O-Ring Test were taught to the medical students in a special course "Study of Non-Conventional Medical Techniques"

The method would be implemented more easily if we had available:

-handbooks in European languages

-Test-sets

Both kept up to date with the new discoveries to come.

3 世代にわたり頭部に Treponema Pallidum 及び鉛との共鳴反応を認めた頭痛の症例

○鮎澤 聡,¹⁾M.D.、矢野平一,M.D.,Ph.D.²⁾、榎本貴夫,M.D.,Ph.D.¹⁾、能勢忠男,M.D.,Ph.D.¹⁾

1) 筑波大学臨床医学系脳神経外科 2) 東京慈恵会医科大学付属柏病院総合内科

母娘及び祖母の3世代に片頭痛及び頭痛を呈し、ニューヨークの Prof. Omura, Y.によって創始・開発された Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) にて頭部に Treponema Pallidum と鉛の共鳴反応を認め、抗生物質と漢方薬の内服で症状の改善を認めた症例を経験したので報告する。

【症例1】23才、女性。幼少時よりの頭痛。前兆を伴わない片頭痛と診断。BDORTでは、左頭頂後頭部に Treponema Pallidum 及び鉛との共鳴反応を認めた。桂枝茯苓丸及び Amoxicillin の服用にて片頭痛発作はほぼ消失し、また「頭が軽くなった」という。Treponema Pallidum の共鳴反応も消失したが、未治療の母親が接近すると共鳴反応が再び認められた。この反応は、母親の治療後には消失した。【症例2】55才、症例1の母親。前兆発作を伴う片頭痛。頭痛薬を頻用している。BDORTでは、症例1とほぼ同様の部位に Treponema Pallidum 及び鉛との共鳴反応を認めた。当初、桂枝茯苓丸のみ服用させたが頭痛は軽快せず。Amoxcillin を加えたところ、頭痛発作

は著明に軽減し、頭痛薬はほぼ不要となった。【症例3】87才、症例1の母方の祖母（症例2の母親）。痴呆あり。前頭部に Treponema Pallidum と鉛の共鳴部位を認める。頭頂後頭部にも弱い共鳴を認めた。Amoxicillin 及び桂枝茯苓丸の服用にて「頭が軽くなった」と述べた。なお、いずれの症例でも血清学的に梅毒反応は陰性であった。

【考察】本症例では抗生物質が頭痛の治療に有効であったことは経過上明らかである。適切な薬剤の選択に BDORT は有用な方法であると考えられた。一方、娘の Treponema Pallidum の共鳴反応が、母親を近づけると反応が強くなる現象が認められた。Treponema Pallidum と関連した何らかの母娘間の機能的連関が存在し、BDORT ではその機能系を検出していた可能性がある。片頭痛が母子間に遺伝的傾向が強いことを考えると興味深い。また、東洋医学における母子同服の概念との関わりが考えられた。

連絡先 〒305 つくば市天王台 1-1-1 TEL 0298-53-3220

症状が遷延している頸椎捻挫症例の Bi-Digital O-Ring Test による診断と治療

○鮎澤 聡,¹⁾M.D.、矢野平一,²⁾M.D.,Ph.D.、榎本貴夫,¹⁾M.D.,Ph.D.、能勢忠男,¹⁾M.D.,Ph.D.

1) 筑波大学臨床医学系脳神経外科 2) 東京慈恵会医科大学付属柏病院総合内科

【目的】頸椎捻挫は身近な疾患であるが、外傷が軽度な場合でも愁訴が遷延し治療が困難な場合がある。今回そのような症例に対し、ニューヨークの Prof. Omura, Y.によって創始・開発された Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) を試みた。

【対象と方法】鎮痛剤・鎮痙剤・精神安定剤等の内服や牽引等の物理療法で症状の改善しない12名（男9名女3名、年齢は34才から71才）を対象とした。受傷からBDORTまでの期間は2ヶ月から28年。症状は、肩こり、後頸部痛に加えて、頭痛、めまい、後眼窩痛、ほてり、嘔声、易疲労感など多彩であり、うち3例は Barré-Liéou 症候群を呈していた。3例に明らかな上肢の筋脱力を認めた。

【結果】（1）全例に肩井穴周囲及び椎骨動脈領域に異常な反応を認めた。（2）共鳴テストを9例に行った；7例にTXB2との共鳴、4例に水銀との共鳴、5例に細菌あるいはウイルスとの共鳴を認めた（3）11例に症例に応じた駆血剤が適合した。中国パセリは6例に適合であり、その内の3例に水銀との共鳴を認めた。細菌やウイルスとの共鳴を認める症例では対応する抗生物質・抗ウイルス薬が適合した。治療の経過に応じて、薬物の量あるいは種類が変化する例を認めた。（4）全例に症状の改善を認めた。上肢の筋力低下を認めた3例は筋力の回復が得られた。特に2例は、BDORTにより選んだ薬剤を手握ただけで筋力の回復を認めた。7例は廃薬に至った。（5）主訴のみならず、血糖、皮疹、消化器症状等の改善を認めた。

【考察】頸椎捻挫後の症状の遷延化に椎骨動脈関連の領域における金属の沈着や感染の関与が示唆された。適切な薬剤の選択にBDORTは有用であると考えられた。症状の改善に全身的な改善を伴っていることはBDORTによる診療の特徴であり有用点の一つであると考えられた。また今回、薬剤を握っただけで即時に握力が著明に改善した症例を経験し、生体の機能異常ならびにその改善に電磁場を介した機序が推定された。

連絡先 〒305 つくば市天王台 1-1-1 Tel 0298-53-3220

Evaluation of Uterine Activity in Pregnant and Non-Pregnant Rats Before and After Electroacupuncture Stimulation and the Influence of Central Nervous System.

Paulo L. Farber, M.D.; Marcelo Zugaib, M.D.; César Timo-Iaria, M.D., Ph.D. Department of Acupuncture Research, University of Sao Paulo Medical School Department of Obstetrics, University of Sao Paulo Medical School Laboratory of Experimental Neurology, University of Sao Paulo Medical School, Sao Paulo, Brazil

Abstract

Objective: Evaluation of uterine activity (UA) before and after acupuncture stimulation and the influence of central nervous system (CNS) on UA.

Methods: We used 16 female Wistar rats, 7 pregnant and 9 non-pregnants, deeply anaesthetized. In 8 animals (6 non pregnant and 2 pregnant) we placed electrodes at cerebral cortex (areas 3 and 10) and hippocampus (area CA1). All animal had a pair of electrodes at uterus. Pregnant rats, between 14-19 days of pregnancy, after 30 minutes initial observation, are submitted to 90 minutes of electroacupuncture at acupoints Sanyinjiao (SP-6) and Zusanli (S-36).

Results: The uterine activity were similar in pregnant (1, 87 contractions/ 3 minutes) and non pregnant rats (1,82 contractions/ 3 minutes, $p > 0.1$). After electroacupuncture, the number of events rises for 1,87/ 3 minutes to (23,21/ 3 minutes; $p < 0.01$). In 3 rats (1 non-pregnant and 2 pregnant), after anesthetics, we find correlation between the rise of cerebral activity (cortex and hippocampus) and the uterine activity. Using Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) resonance phenomenon originally found and developed by Prof. Omura, Y. of New York between two identical substances with a piece of rat's uterus as a control substance we found resonance with the dorsal part of hippocampus (CAI area) and surrounding cerebral cortex.

Conclusions: Uterine activity rises after 90 minutes of electroacupuncture in Wistar pregnant rats, and activation of CNS may be involved in this phenomenon.

耳の臓器代表領域と難病治療について

横内正典, M.D.¹⁾、岩水明美¹⁾、吉田佳子, Pharm.¹⁾、丸山修寛, M.D., Ph.D.²⁾、本田龍三, M.D.³⁾、加島春来⁴⁾、楊孝康, M.D.⁵⁾、原田一哉, M.D., Ph.D.⁶⁾ 東京都O - リングテスト医学研究会 & 横内醫院¹⁾、仙台市O - リングテスト医学研究会 & 徳州会病院²⁾、札幌市O - リングテスト医学研究会 & 牧田病院³⁾、松山市東洋医学O - リングテスト研究会⁴⁾、北海道O - リングテスト医学研究会 & 穂別町立病院⁵⁾、小山市O - リングテスト医学研究会 & 神鳥谷クリニック⁶⁾

1951年フランスのP. ノジェは、耳介反射点が逆位胎児図と合致するという発見をした。耳介において圧力を加えて痛みを感じる場所を探ったり、電流処置によるテストで、数多くの身体との対応点を探知することが可能となり、臨床の結果から裏付けられたとしている。またノジェは、患者の脈を取りながら、耳介の病理点に触れると脈の打ち方が変わるのを知覚し、耳介心臓反射と名付けている。ノジェの耳介反射点に触発され、中華人民共和国でも古典の見直しが進み、耳針治療が注目を浴びるようになった。演者は1974年以来、針麻酔および針治療を行い、ノジェおよび鍼灸経外奇穴図譜(1976年現代中国医療協会版)の耳針を併用し、治療効果を挙げてきた。しかし耳針治療による効果が、全く認められない症例も経験した。そこで、演者等は1997年5月10日から19日にかけて、ノジェおよび前記図譜の耳介反射点を、正常組織プレパラートを使用し、ニューヨークのProf. Omura, Y.により創始、開発されたO - リングテスト共鳴現象により検索した。その結果、耳の臓器代表領域は、ノジェ等の耳診と外胚葉由来の組織において大きく異なっていた。ノジェは耳垂下部に大脳があると判定しているが、大脳プレパラートでは共鳴を認めなかった。同部は下顎骨および大臼歯が共鳴した。大脳は対珠部分にて共鳴した。さらに内、中胚葉部分においても、ノジェの耳介反射点とは異なる結果を得た。また耳介後面にも臓器代表領域があることが、確認された。1997年5月19日以来、癌患者を始め難病患者の治療

において、演者等の確認した耳の前面および後面の臓器代表領域に、氣功エネルギーの入った布を貼付することで、従来の耳針治療よりも優れた効果が得られるようになった。なお治療に必要な臓器代表領域の決定は、0ーリングテストにて行った。ノジェラの耳介反射点と0ーリングテストによる耳の臓器代表領域の違いを指摘し、難病治療への応用を報告する。

横内醫院 〒164 東京都中野区東中野 4-4-1 ポレポレ坐ビル 6F TEL/FAX
03-5386-0205

家畜（動物）の Bi-Digital O-Ring Test

松原利光,D.V.M.,Ph.D. 麻布大学獣医学部獣医内科第一講座助教授

21 世紀の人口増加、自然災害に対応する食糧事情として動物性蛋白質は重要である。国際的に最も注目されている増体率の極めて良好な肉牛 Blanc Bleu Belge を診察する機会を得た。輸入国である Canada Flightpath の David and Joanne Currie Farm を視察研修した。Currie Farm の飼養方式は B.B.B. Purebred、Crossbred で 500 頭、Loosebarn System を採用していた。健康管理は Beef Cattle Specialist の Veterinarian によって指導され、飼育技術は Mrs.Currie (Canada B.B.B. Asso Secretary Manager)等によって経営されている。ニューヨークの Prof. Omura, Y.により創始開発された Bi-Digital O-Ring Test は両者の立ち会いの下で実施した。診断手順として、O-Ring Test は研修随行した Dr.Hayakawa を 3rd Person とし、演者が Examiner となって進めた。診断法の 3 条件を確認し、診察環境を整備した。

健康標準牛の検査：体重 250kg B.B.B.牡牛、体重 300kg Cross 雌牛の 2 頭を診断した。

3rd Person の 1-2 digital、Examiner は - digital を+1 の指とした。胸腺(Thymus gland)

平均=♂-3.25、♀-2.75、気管(Trachea)平均=♂+2.75、♀+3.25、肺(Lungs)平均=♂+3.25、♀+2.5、心臓(Heart)平均=♂+2.75、♀+3.25、2 頭の検定牛は臨床的に健康であったが、O-Ring Test による診断でも健康であった。

Currie Farm の専属 Veterinarian によって、選択した病弱牛の検査

Veterinarian の Notification：体重 300kg やや脱水、元気食欲不振、中等度発熱、下痢症状中等度、を示した B.B.B.牡牛、診察環境コンクリート床面上に Straw chips を十分に敷き詰め、grounding を避けた、3rd Person 1-2 および Examiner - 指の再検討をした。刺激媒体は Class 2、Max-output < 1mW LASER Pointer 670nm を使用、胸腺(Thymus gland)平均=-1.5、気管(Trachea)平均=-2.13、肺(Lungs)平均=-2.65、心臓(Heart)平均=-3.12 という結果がでた。本病弱牛は 5 日前から冷風雨に曝され、気管支肺炎に冒され発熱、咳が続いていた。抗菌剤、リンゲル輸液、ビタミン剤で快復に向かっているとの事前診断経過を報告された。今後、薬物種類、器官組織を用いた診断でより良い診療が期待されると同時に動物特有の臓器イメージング方法を開発されることが望ましい。

〒229 神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71 TEL.0427(54)7111 FAX.0427(53)3395

当院に於ける B.D.ORT にて微生物の感染及び重金属の蓄積に起因すると推定された歯科難症例の集計報告と最近の幾つかの症例について

福岡博史, D.D.S.,Ph.D.¹⁾,野本種邦,D.D.S.,Ph.D.^{1,2)},小山悠子,D.D.S.,Ph.D.¹⁾, 福岡明, D.D.S.,Ph.D., 東京歯科大学評議員^{1,3)}

1) 医療法人社団明徳会福岡歯科東洋医学研究所, 東京 2) 慶應義塾大学医学部客員教授 3) 東京歯科大学

【目的】炎症・麻痺などの存在部位、微生物の感染及び重金属類の蓄積などを推定し、体表にその反応域を記すニューヨークの Prof. Omura, Y. によって創始、開発された B.D.ORT のイメージング法は歯科臨床に於ける難症例疾患に大いに利用価値を見出す。今回は本法を適用し疾患の原因を推定し、投与薬剤の選定などの治療方針を定め、早期に治癒に導いた最近の症例を示し、当院の過去 10 年間の集計処理報告とする。

【症例】(1)末梢性顔面神経麻痺の患者 65 歳の男性にウイルス(HSV2)細菌(Streptococcus)の共鳴をみた例

(2)2 年間ヘルペス感染と診断され全身の湿疹に悩み、ORT にてカビ (KY32) 共鳴をみ、ORT で選定した健康食品の摂取にて 6 ヶ月にて快癒に導いた例

(3)咬合の不正に起因すると疑われた前頸部筋痙攣の 53 歳の主婦の頭部に鉛の共鳴を見た例

(4)下顎第二大臼歯部の慢性疼痛をもち、薬物アレルギーを疑われた 26 歳女性に鉛の共鳴をみた例

(5)頭部より眼窩、顎関節部、耳介後部にわたる慢性疼痛を訴える 39 歳女性に水銀の共鳴をみた例

(6)当院にて ORT のイメージング法を施術した 120 例の疾患では、微生物感染 52 例、重金属例、両者共に共鳴したもの 9 例、カビに共鳴したもの 4 例であった。【結果】以上の症例に ORT を適用して健康食品の投与や、鍼灸・TEASなどを施術し治癒までの経過を観察した。また、治療の進行により ORT で体表にイメージング描記した異常部位の縮小して行く経過を患者自身に確認させることにより、闘病意欲を増進させ、セルフコントロールを助長した。

【考察及び結論】西洋医学的診断法では的確な結論を出せない歯科疾患難症例について、ORT で原因を推定することにより、治療方針を立案し施術することで全身的对応がなされたことから、更に当院過去 10 年の ORT による症例集計の結果からも、日常歯科臨床における ORT の適用に有用性を認めることができた。

キーワード：歯科難症例、ORT イメージング法による疾患別集計結果

〒104 東京都中央区新川 1 - 3 - 7 六甲第 2 ビル 3 階 TEL.03-3555-2221 FAX.03-3555-2225

Bi-Digital O-Ring Test 法による顎関節部の診査 ()

野本種邦,D.D.S.,Ph.D,慶應義塾大学医学部客員教授^{1,2)}, 福岡博史,D.D.S.,Ph.D²⁾, 小山悠子,D.D.S.,Ph.D²⁾, 福岡 明,D.D.S.,Ph.D,東京歯科大学評議員^{2,3)} 1)慶應義塾大学医学部客員教授 2)医療法人明徳会福岡歯科東洋医学研究所,東京 3)東京歯科大学

【目的】近年、顎関節機能異常 (TMD) 患者が増加している。その診断には顎関節 (TMJ) 部組織の器質的变化と位置的变化の診査が重要である。1993 年にニューヨークの Prof. Omura, Y. が初めて正常と異常な TMJ の関節窩、円板及び下顎頭のアウトラインを Bi-Digital O-Ring Test 共鳴法を描記する事に成功した。我々は Prof. Omura, Y. の Bi-Digital O-Ring Test (ORT) 法を TMD 患者の診断に応用した。

【方法】我々は ORT Imaging 法を TMD 患者の TMJ 部診査に応用し関節窩、円板および下顎頭の画像を顔面に描記した。これらの診査は閉口位と大開口位で行った。他方、同じ患者について MR 画像撮影も行った。現在 MR 画像診断法は TMD 診断に最も適した診査方法と評価されている。

【結果】我々は二つの診査方法から得られた画像について比較検討した。骨組織（関節窩と下顎頭）の画像は鮮明で器質的および位置的变化を認めることができた。しかし、ORT Imaging 法で得られた円板の画像は MRI の画像に比べて鮮明度が低かった。それらのうち、器質的变化が比較できない例があった。しかし、これらの例も位置的变化は、認めることが可能であった。

【結論】このような結果から BDORT Imaging 法の TMD 患者の診断に対する応用は有用であると考えられる。

〒104 東京都中央区新川 1—3—7 六甲第 2 ビル 3 階 : 03-3555-2221 FAX : 03-3555-2225

咬合治療の身体関節疾患への対応

藤井佳朗, D.D.S 名古屋市バイ・デジタル O - リングテスト研究会 & 藤井歯科医院, 名古屋

【緒言】歯の噛み合わせの全身への影響が明らかとなり、歯科領域からの全身疾患への対応が盛んに行われている。関節疾患も例外ではなく、リウマチによる関節痛や変形性膝関節症などに対する歯科からの治験報告もみられる。今回は、各種関節疾患に対して、Prof. Omura, Y.によって創始されたバイ・デジタル O - リングテストを利用した咬合治療効果を報告する。

【方法】変形性膝関節疾患、リウマチによる上肢挙上不全、腰痛を伴う下肢挙上不全、こりを伴う頸部回旋不全に対して、スプリント、部分床義歯、咬合調整などの咬合調整などの咬合治療を O - リングテスト結果を参考にしながら生理的顎位の探索を行い、治療前後の症状の変化を検討した。

【結果】いずれの場合も治療効果が認められた。とくに症状として随伴していた関節痛やこりの軽減も、みられた。

【考察】咬合と全身との関わりが再認識された。とくに関節痛やそれに伴う関節可動不全にも有効な場合のあることが示唆された。生理的咬合位の探索に O - リングテストは時にきわめて有用であると思われた。ただ、歯科においては、血液検査や頸部以下のエックス線写真などが一般でないため、医科において治療効果が十分にみられず、且つ癌などの器質的疾患が、医科の検査で発見できなかった場合のみ検討すべき治療法と考える。したがって、治療としては医科からの紹介で、専門医の監視のもとで歯科治療を遂行するのが最も安全と思われる。

〒464 名古屋市千種区京命 2 丁目 16-7 パークヒルズ京命 B-203 TEL . 052-777-4154

ブラキシズムや咬合不全感に対する抗生物質投与経験

堀 勝利, D.D.S. 福岡市バイ・デジタル O - リングテスト研究会 & 堀 歯科医院, 福岡市

(目的) ブラキシズムや咬合不全感を訴えた患者にバイ・デジタル O - リングテストを用いて診察し、抗生物質の投与を行ったところ、著しい改善を経験したので報告する。

(症例 1) 夜間のブラキシズムに起因すると思われた、顎顔面部から全身にわたる起床時の疲労感、肩凝り、歯の痺れ感を主訴として来院し、歯牙脱落の恐怖さえ抱いていた、21 歳の女性。

(症例 2) 十分な上下の歯牙接触が認められるにもかかわらず、咬合時に歯牙に力が入らないとの主訴で来院した、61 歳の女性。2 例ともバイ・デジタル O - リングテストにおいて、側頭部に細菌感染に関連すると思われる異常が認められた。同時に扁桃や脾臓、脾臓にも細菌感染が疑われた。扁桃や脾臓等との関連を考慮しつつ、側頭部の感染に対して効果的な抗生物質の種類と量を、バイ・デジタル O - リングテストにより求め投与した。同時に病変部へのドラッグアップテイクを増すために、鍼やソフトレザーを用いた。利用したのは下関や耳のツボである。2 例とも咬合などにも問題が伺われたが、咬合の調整などその他の処置や指導は行っていない。

(結果)症例 1 では 6 日間、症例 2 では 2 日間の投薬で症状はほとんど消失した。

(考察)側頭部に認められた異常は視床の異常と推測している。感染により視床の知覚、運動のコントロールの乱れが生じ、症状を引き起こしていると考えた。一般的にブラキシズムは咬合や精神的ストレスが原因と考えられ、細菌感染との関連を考慮した処置はほとんどなされていない。今回臨床的に夜間ブラキシズムが疑われた症例に、バイ・デジタル O - リングテストにより細菌感染を疑い、抗生物質の投与を行ったところ非常に著大な改善を経験し、ブラキシズムの症状の緩和のためには感染症も考慮すべきであると思われた。

〒813 福岡市東区水谷 2-10-22 TEL : 092-672-8255 FAX : 092- 672-8255

Vitex agnus-cutus に使用に対する O-リングテスト

広部千恵子,Ph.D. 清泉女子大学人間科学課程教授

ビテックスはヨーロッパでは良く知られたハーブで、イタリア、ギリシャ等の地中海沿岸に自生している。この植物は婦人の気分沈滞、腹痛、気分の動揺、むくみ、体重増加などホルモンのアンバランスを治す作用がある。従って閉経期の諸症状をやわらげるし、母親の乳汁分泌を促す作用がある。今回、このビテックスをゴラン高原で採集し、その抗腫瘍活性を他の 60 種類の植物と共にスクリーニングテストにかけた。この結果ビテックスはかなり良い結果を示した。このビテックスに対して、in-vitro ではあるが人の癌細胞に対する活性も検査してみた。結果は満足できるものであった。この結果、良く知られているハーブ、ビテックスは癌とくに乳癌、子宮癌、卵巣癌に有効であることが分かる。このビテックスはヨーロッパや中東ではよく知られているハーブであり、2000 年間何の副作用も報告されていないので、日本でももし O-リングテストで、量と他の食品や薬との相性を検討して使用すれば利用価値の高いものであると思われる。

〒141 東京都品川区東五反田 3 - 16 - 21 TEL : 03-3447-5551 FAX : 03-3447-5493

Bi-Digital O-Ring Test による補穴、瀉穴と臓器標本との関連性についての臨床的研究 (その 1)

北出利勝、Ph. D. 明治鍼灸大学 東洋医学教室教授

【目的】扁鵲 (B.C.500 年頃) の著述とされる『黄帝八十一難經』の中に、経絡治療で重視されている選穴法に「六十九難」がある。そこで、「六十九難曰経言、虚者補之實者泄之不虚不實以経取之何謂也、然虚者補其母、實者瀉其子」(虚すればその母を補い、実すればその子を瀉す)に従って、同一経の母穴もしくは子穴(補穴と瀉穴)を研究対象とした。つまり、これらの経穴がどのような臓器標本と関連性があるのかを、ニューヨークの Prof. Omura, Y.によって創始・開発された Bi-Digital O-Ring Test (BDORT)の手法を用いて臨床的に研究した。

【方法】不特定疾患の患者 10 例（男：3 例、女：7 例）の補穴、瀉穴の経穴（24 穴）を対象とした（1997 年 7～8 月）。BDORT は直接法を用い、正常な臓器標本を保持させ、絶縁棒で経穴上の皮膚を圧迫したとき、検査指を牽引する。指が開いた場合、その部位と標本とは関連性があると判定した。

【結果】（1）殆どの経穴の輪郭は、その経穴の所属経と同じ臓器標本と共鳴現象を呈した。つまり、太淵・尺沢穴は、肺経の標本と共鳴した。しかし、心包経は副腎に、脾経は脾臓に、三焦経は甲状腺に、膀胱経は腹膜に各々共鳴した。（2 各経穴は重層構造を呈しており、中心部位は他の臓器標本と共鳴した。（3）ひとつの経穴は単一の臓器と関連するのではなく、全て複数の臓器と関連していることが判った。（謝辞：黒川勝治氏、篠原昭二氏の協力を賜った。）

Key Words : Bi-Digital O-Ring Test,補穴、瀉穴、鍼灸療法

経脈	肺	大腸	胃	脾	心	小腸	膀胱	腎	心包	三焦	胆	肝
補穴	太淵	曲池	解谿	太都	少衝	後谿	至陰	復溜	中衝	中渚	侠谿	曲泉
瀉穴	尺沢	二間	厲兌	商丘	神門	小海	束骨	湧泉	大陵	天井	陽輔	行間
輪郭の標本	肺臓	大腸	胃(幽門洞)	脾臓	心筋	小腸(パイエル板)	腹膜	腎臓	副腎	甲状腺	胆嚢管	肝臓(クッパー細胞)

〒629-03 京都府船井郡日吉町 TEL.:0771-72-1181, FAX.:0771-72-0326

【招待特別講演】

「気の科学」

町 好雄, Sc.D. 東京電機大学工学部電子工学科教授

気の科学的な研究は、日本において約 10 年の歴史があるのみであり、最近になって国内での研究がやっと軌道に乗り始めたと感じられる。この国際シンポジウムにおいてお話しするのは私どもの行ってきた気（中国では気功）の研究の結果について報告する。中国では気功には数多くの種類があることが知られているが、ここで述べるのは健康法として、あるいは自己で癒す方法としての内気功については、站しょう功、六字訣、小周天についてお話ししたい。また、外気功としては一般的な測定結果と、外気功として最も影響の強いと考えられる気功麻酔について述べる。この報告で科学的な計測というのは、医療関係者にも理解できるように医学で測定に用いる生理的な測定法を気功の計測に用いたものである。例えば気功前後で脳波が、心拍数が、血圧が、呼吸が、脈波が、ガルバニックレスポンスが、レーザードップラー血流が、超音波エコー等がどうなるかを測定したものである。まず、站しょう功について当日詳しく述べるが、生理的な特徴についてみると、脳波においては無の状態を保つためか、ベータ波は消失し、アルファ波が増加することが分かっている。特にレベルの高い気功師であるとアルファ波が前頭葉まで広がったり、何かに集中するためか特に前頭葉に電位が高くなる人や右脳側が高くなる人が見られる。このと

き心拍数は通常の値に比べ気功を行っている間、高くなることがわかっている。この気功中には呼吸数は低下し1分間に2～3回に低下します。このことは自律神経系をうまく自分の意思で調整していることが分かる。このときの顔や手のサーモグラフィを取ると温度上昇が見られます。これは血流が増加したため、総頸動脈の血流や流速はおよそ2倍程度増加が見られます。

この気功は基本的なもので、誰でもできることが要求される。それでこの気功を行う前と気功中の最大心拍数の比をとり(比が1以上になる)、これと気功の練習年数を調べることで気功の熟達の程度が分かる方法を見出した。この方法と当日述べる別の方法を組み合わせるとこの気功がどの程度できるかを知ることができる。六字訣は医療気功であり、簡単な動作を伴い6つの音を発する気功である。この場合音を発する(息を強く吐く)と心拍数は変化し、呼気でもとにもどることが分かっている。つまり音を出したりやめることで自律神経系を調整していることがわかった。また同時に長強の“ツボ”を引き締めてやることが重要であったり、音を発した後に脳波にアルファ波が比較的強く現われ、血流も改善されうることにもわかった。ただ中国語で発声するため日本人にはやや難しいということもある。小周天は周天派の気功法であるが、気の最強の“ツボ”から督脈を通じて気を持ち上げ頭の後ろから百会穴を通り、頭の前に気を回し、任脈を通じて気を下ろすということでこれを何度でも繰り返す。この繰り返しは1呼吸で身体に1回気を回し、頭を通過する時に後頭葉から前頭葉にアルファ波がつながることを見出した。このことは間接的に気を回していることを伺い知ることができた。外気功の中で特に強いものと考えられる気功麻酔についても報告する。この実験では実際には手術中は実験できないが、健常人に気功麻酔をしていただき、両者の生理的な測定を行った。麻酔をかける気功師の先生はアルファ波が強くなり、集中していることがわかった。また患者役の人も同様に前頭葉にアルファ波が強くなり、両者間で脳波に同調現象が見られた。また、両者の心拍数の変動が現われ、気功麻酔をかける時間の経過に従い、次第に増加して同調現象が見られた。この気功麻酔の先生の呼吸は次第に強くなり、呼吸でコントロールしていることが分かった。また麻酔を受けた人は時間の経過に従い、GSRに示される緊張度が次第に低下することで麻酔の効果が現われてきたと考える。以上、各種気功について簡単に述べたが、当日はデータを示しながらお話しする。

Stored Qi Gong Energy in Various Materials and Characteristics of 2Types((+)&(-)) of Qi Gong Energy Which Have Opposite Effects:Clinical Applications of (+) Qi Gong Energy for the Treatment of Intractable Medical Problems Including Pain, Infection,Cardiovascular Disease & Cancer

Yoshiaki Omura, M.D., Sc. D., F.A.C.A., F.I.C.A.E. Director of Medical Research, Heart Disease Research Foundation; President, International College of Acupuncture & Electro-therapeutics; Visiting Research Prof., Dept. of Electrical Engineering, Manhattan College; Prof., Dept. of Non-Orthodox Medicine, Ukrainian National (former Kiev) Medical University; Former Adjunct Prof., Dept. of Pharmacology, Chicago Medical School.

Abstract

In 1988, using the Bi-Digital O-Ring Test, we evaluated the changes on different parts of the body of a renowned Qi Gong master before, during, and after he performed external Qi Gong treatment. We found significant Bi-Digital O-Ring Test weakening responses at specific parts of the body that were otherwise normal before and after Qi Gong treatment. Among the many areas, changes at Qi Hai (C.V.6), Shi Men (C.V.5), and entire spine was significant. Among these changes, Shi Men showed the maximum Bi-Digital O-Ring Test weakening changes. Using changes in C.V.5 as a major criteria to evaluate whether or not the Qi Gong master is actually emitting detectable Qi Gong energy, the author was able to analyze all of the essential parameters necessary to emit external Qi Gong effectively. Using the methods developed from this investigation to generate external Qi Gong energy, the author obtained significant therapeutic effects in reducing or eliminating pain, improving circulation and enhancing drug uptake. However, within 24 hours after performing each external Qi Gong treatment, the author noticed an

internal GI hemorrhage, which can be identified by a positive occult blood test. As a result, the teaching and practice of this newly discovered quick and effective method of external Qi Gong emission was temporarily discontinued.

To solve this problem, the author attempted to store the Qi Gong energy in different materials and succeeded in storing it on paper, wood, glass, metals, cloth materials, Band-Aids, etc. When stored Qi Gong energy on a piece of paper was applied to painful area, some of the Qi Gong energy stored paper reduced or eliminated pain with improvement of circulation within 30 seconds while also strengthening the weakened muscles. However, application of some of the paper produced a completely opposite effect and enhanced the pain with disturbance of circulation accompanied by a marked increase of Thromboxane B₂ & Substance P and weakening of the muscles detected using the Bi-Digital O-Ring Test. The degree of the pain was also quantitatively measured by a Dolorimeter. Further study of these phenomena lead the author to discover that there exist two completely opposing types of Qi Gong energy. One type which reduces or eliminates pain, improves the circulation by including vasodilation, and strengthens weak muscles was called (+) Qi Gong and the opposite type was called (-) Qi Gong. The (-) Qi Gong induces vasoconstriction, which enhances circulatory disturbance and accumulation of Thromboxane B₂ and if it is applied in the painful area, Substance P increases markedly resulting in exacerbation of existing pain. When (-) Qi Gong energy is applied directly from the Qi Gong master's hand on the heart or brain of the patient, it has the potential to induce angina, or even more myocardial infarct, as well as transient ischemic attack or stroke. Particularly, if the patient has pre-existing myocardial infarct, as well as transient ischemic or cerebral circulatory problems, the potential risk is very high. Therefore, in order to use Qi Gong safely, one needs to know how both (+) and (-) Qi Gong energies are emitted.

Initially, when Qi Gong energy was stored on paper, part of the same side of the paper had (+) Qi Gong energy and the remaining part of the same side had (-) Qi Gong energy. In 1989, the author succeeded in storing one side of paper or other materials with pure (+) or (-) Qi Gong energy. Subsequently, the author also found that when (+) Qi Gong energy is stored on one surface of paper or other materials becomes charged with (-) Qi Gong energy always forming a (+) & (-) pair with opposite polarities that are inseparable, like those of N & S of a magnet although their physical properties are quite different. When two sides of paper with Qi Gong energy of the same polarity face each other, the stored Qi Gong energy instantaneously disappear by exposing the paper to a strong, fluctuating electromagnetic field. When the Qi Gong energy stored paper is completely covered with aluminum foil, the stored Qi Gong energy will remain many years, as long as it is not directly exposed to a strong electromagnetic field. At one time, Qi Gong energy can be stored in several hundred pieces of piled paper in less than one minute. Instead of administering Qi Gong energy directly to the patient, the patient is given Qi Gong energy stored paper and instructed to apply the side charged with (+) Qi Gong energy to the pathological area(s) to be treated with or without effective medication. For example, angina pain due to ischemic heart can often quickly be subsided by applying (+) Qi Gong energy stored paper directly on the chest wall above the left ventricle. Similarly, pain due to circulatory disturbance and accumulation of Substance P often subside. Subsequent study indicated that the application of (+) Qi Gong energy stored paper directly above the pathological area enhances drug uptake in the area in which drug uptake was very poor and previously medications were unable to reach therapeutic levels. In addition, the author found that the application of (+) Qi Gong energy stored paper on the accurate organ representation area on the scalp, ears, tongue, hands, and feet can also improve the circulation to the corresponding organ and selectively enhance drug uptake specifically to that organ. Particularly, application of (+) Qi Gong energy stored paper on the cardiovascular representation area of the modulla oblongata at the occipital part of the head can enhance drug uptake in various parts of the body where multiple pathology exists and drug uptake is poor such as in the case of multiple metastasis of cancer in different parts of the body. These new findings have been applied to many intractable medical problems where even the effective drug cannot reach therapeutic levels in the pathological area to be treated. The author's previous studies indicated that in the cancer cells the following parameters co-exist: 1) marked increase in Oncogene C-fos Ab2, 2) marked increase in Integrin α 5 β 1, 3) marked increase in Hg, 4) marked decrease or disappearance of Acetylcholine, 5) marked decrease or disappearance of NO, 6) presence of Viral Infection. Our

previous studies also indicated that in the area of the intractable bacterial or viral infection often heavy metal, anti-bacterial or anti-viral effects are often inhibited. In 1995, the author also discovered that oral intake of cilantro can remove Hg, Pb, and Al very effectively particularly when combined with selective drug uptake enhancement method using (+) Qi Gong energy stored paper or several other methods that were published earlier. For example, for the treatment of cancer with or without metastasis we use a mixture of EPA(Eicosa Pentaenoic Acid) and DHA(Docosa Hexanoic Acid) as an effective anti-viral agent with cilantro to remove Hg with or without additional compatible synergistic natural anti-cancer agent, combined with selective drug uptake enhancement method using the (+) Qi Gong energy stored paper application on the area above the cardiovascular representation area of the medulla oblongata. As a result of these findings, we can treat intractable pain, intractable infection, cardiovascular diseases, stroke and cancer more effectively and safely along with effective medication and using cilantro we can actively and safely remove localized deposits of heavy metals such as Hg or Pb which inhibit the antibiotics or chemotherapeutic effects. Typical examples of successful treatments of intractable neck pain due to Lyme disease, severe pre-menstrual pain and infertility due to Chlamydia Trachomatis infection, terminal cases of breast, lung and prostate cancer with multiple metastasis, paralysis of one side of the body and speech problems due to stroke.

Early Cancer Screening and a New Safe and Effective Cancer Therapy Using Selective Drug Uptake Enhancement Methods, Anti-Viral Agents, and the Removal of Mercury Based on the Bi-Digital O-Ring Test Evaluation

Yoshiaki Omura, M.D., Sc. D., F.A.C.A., F.I.C.A.E. Director of Medical Research, Heart Disease Research Foundation; President, International College of Acupuncture & Electro-therapeutics; Visiting Research Prof., Dept. of Electrical Engineering, Manhattan College; Prof., Dept. of Non-Orthodox Medicine, Ukrainian National (former Kiev) Medical University; Former Adjunct Prof., Dept. of Pharmacology, Chicago Medical School.

Abstract

The author's previous studies indicated that various cancer and pre-cancer tissues of different organs have the following 6 coexisting parameters: 1) markedly increased Oncogene C-fos Ab2; 2) markedly increased Integrin $\alpha 5\beta 1$; 3) markedly increased Hg; 4) marked decrease or absence of acetylcholine; 5) marked decrease or absence of NO; 6) marked presence of virus. To screen any type of cancer either Oncogene C-fos Ab2 or Integrin $\alpha 5\beta 1$ is used as the reference control substance to detect significant resonance phenomena between these substances in the cancer tissue of the patient and the reference control substance. In order to do mass screening, in the early 1990s the author developed a simple, quick screening method using a 670 nm lead laser beam with output power of 0.5-5mW and indirect Bi-Digital O-Ring Testing. Each subject was asked to raise both hands and spread their feet, exposing upper and lower limbs. The intermediate person standing between 10 and 50 meters from the subject, simultaneously held a miniature laser generator (approximately 5cm \times 3cm \times 1.3cm) and Integrin $\alpha 5\beta 1$ in the palm of his weaker hand, with his index finger extended in the direction of the laser beam. As the intermediate pointed the laser beam at different portions of the subject's body, the examiner examined the Bi-Digital O-Ring Test which satisfied the 3 essential requirements for reproducible testing of the intermediate person. Once a strong positive resonance is detected, the approximate location of the cancer can be estimated. For example, if a strong positive resonance is detected while the laser is pointed at the subject's right hand than pre-cancer or cancer of the right side above the diaphragm can be suspected. If the left hand of the subject yields a positive response, then pre-cancer or cancer in the left half of the body above the diaphragm can be suspected. If the right foot of the subject shows a positive response, then pre-cancer or cancer in the right half of the body, below the diaphragm, is suspected. If the left foot of the subject shows a positive response, pre-cancer or cancer is suspected in the left half of the body below diaphragm. In order to screen for cancer or pre-cancer in brain, the laser is pointed at a specific area of the ear lobule on each side of the head and the subject is examined at a very short distance from the intermediary to avoid inadvertent exposure of the subject's eyes to the laser beam. Using this method, an average of one minute is required to screen one person. After the approximate location of cancer or

pre-cancer is determined, the exact location is determined using the in-direct Bi-Digital O-Ring Test. Aluminum foil is placed over the suspected cancerous or pre-cancerous area and the intermediate places three fingers of the hand holding the reference control substance on the aluminum foil. If there is a positive response, then the area of the aluminum foil is reduced by half to narrow the field further. When a small area has been isolated, a fine brass electrode is used to pinpoint and map the exact location of pathology on the body's surface. Once the exact location is mapped, we screen for the remaining 5 parameters for cancer and pre-cancer at that location. If the remaining 5 parameters are found to co-exist, standard laboratory confirmation as well as cancer markers are examined. If laboratory testing does not confirm cancer, we consider the condition to be pre-cancerous. Once pre-cancer or cancer is identified after laboratory tests, and after informed consent forms are signed in the presence of witnesses, a mixture of EPA with DHA, which was found by the author to be an effective antiviral agent more than 10 years ago, is used to inhibit the virus in the cancer tissue. Sometimes, certain effective anti-virus or anti-cancer substances which are compatible and synergistic with a mixture of EPA and DHA are also given, among them certain Propolis or Propollens which were screened with the Bi-Digital O-Ring Test (although many are ineffective). To remove the intracellular Hg, Chinese parsley (Cilantro) is given with one of many drug uptake enhancement methods, previously described by the author, to deliver these substances selectively to the cancer or pre-cancer positive area. The author found that Cilantro also possesses antibacterial and antiviral properties. In general, most anti-cancer drugs cannot reach therapeutic levels in cancer tissue but they can easily reach the remaining normal part of the body. Within the past several years, the author solved this problem by discovering that when the accurate organ representation area at a different part of the body is stimulated by various means, the drug uptake to that organ enhances. Effective stimulation includes Shiatsu, Qi-Gong, Acupuncture, negative electrical fields, low pulse repetition rate electrical stimulation, certain magnetic fields, heat, etc. Each stimulation has advantages and limitations. Using these new methods of cancer treatment, the author treated a number of patients with breast cancer, lung cancer, colon cancer, prostate cancer, with multiple metastases to various parts of the body, many of whom were considered to be terminal. Most of the patients who seriously followed our treatment with these methods in the past two years are still alive and many of them have no detectable signs of cancer. However, in some of the patients, particularly those with recurrent breast cancer, no improvement was found in the recurring cancer near the original surgical site although metastatic cancer in the rest of the body is disappearing. In these patients, we found that the medications were not reaching the breast due in part to the presence of the brassiere. A previous study on this subject revealed that synthetic material inhibits drug uptake. Also, drug uptake to other parts of the body in addition to the breast can be inhibited by the presence of synthetic clothing. Necklaces also inhibit drug uptake within the area covered by the necklace and a 1-2 cm area surroundings the necklace. Earrings inhibit drug uptake to the brain. Watches whose batteries are oriented with the positive side facing the body also inhibit drug uptake, as do metal bands and bracelets generally. Therefore, for the treatment of cancer or any other intractable medical problem, since 1994 the author has been examining not only the patient but also what they wear in order to make sure that drug uptake will not be inhibited. The author's studies indicate that most of his cancer patients had been exposed to strong extremely high frequency electromagnetic fields while sleeping in the same bed over periods ranging from 7 to 10 years. Therefore, if the patient is being treated in the home and the patient is sleeping in the same bed, this can contribute to the further development of the cancer. Therefore, it is essential to examine the patient's bedroom for the existence of invisible but harmful electromagnetic fields. And if an abnormal field is detected it must be properly shielded to prevent further exposure. In 1995, a patient with chronic intractable knee-joint pain as well as upper thigh pain came for evaluation. The Bi-Digital O-Ring Test indicated that the painful knee she had a mixed infection of Chlamydia Trachomatis, for which Doxycycline is effective, and Lyme Borrelia Burgdorferi, for which Wyeth Amoxicillin is effective, plus localized deposits of Hg in the infected area of the knee for Cilantro is prescribed. The cause of the pain in the thigh was Herpes Simplex Type on the side of the thigh and Herpes Simplex Type infection on the other side of the thigh, for which a mixture of EPA and DHA is indicated. Initially, medication did not reach the knee joint but after stimulation of the organ representation area on the hand with Qi Gong as well as Shiatsu, drug uptake was selectively enhanced. A few weeks after the treatment, however, the patient still showed no improvement and subsequent study revealed that while the drug was reaching the pathological area it had no beneficial effect. Good medication, given to the patient after testing for efficacy with the Bi-Digital O-Ring Test,

was found ineffective after each visit when it was rested. Every time effective medications were given to the patient, they became ineffective by the time of her return visit. Our subsequent study indicated that an ultra-sonic insect and mouse repellent that the patient kept on 24 hours a day was inactivating the medication. Further experimentation with this ultra-sonic device revealed that even one minute of exposure could completely destroy the medicine. In addition, the author found that magnetic fields from tape records and video tape itself can destroy the effectiveness of many medications. Recently, many scientists have claimed that bacteria are increasing their resistance to antibiotics, citing mutations in bacteria discovered through gene analysis. But we found some batches of a given antibiotic were effective while other batches of the identical brand were not. Fortunately the Bi-Digital O-Ring Test can detect some of the real causes of the ineffectiveness of the treatment not only for cancer but also for many other intractable medical problems.

Long-term Exposure to Extremely High Frequency Electro-Magnetic Fields in the Home or Office Environment, Localized Deposits of Hg, and Viral Infection in Individuals as Major Contributing Factors for the Genesis of Cancer and Cardiovascular Diseases

Yoshiaki Omura, M.D., Sc. D., F.A.C.A., F.I.C.A.E. Director of Medical Research, Heart Disease Research Foundation; President, International College of Acupuncture & Electro-therapeutics; Visiting Research Prof., Dept. of Electrical Engineering, Manhattan College; Prof., Dept. of Non-Orthodox Medicine, Ukrainian National (former Kiev) Medical University; Former Adjunct Prof., Dept. of Pharmacology, Chicago Medical School.

Abstract

According to our previous studies in the late 1980s and early 1990s, in cancer and precancer the following 5 factors always coexist: 1) marked increase in Oncogene C-fos Ab2; 2) marked increase in Integrin $\alpha_5\beta_1$; 3) marked increase in Hg; 4) marked decrease or disappearance of Acetylcholine; 5) marked Viral infection. In 1996 the author discovered a 6th factor--a marked decrease in NO levels. When the human body is exposed to electrical fields of extremely low frequency (ELF of less than 2 KHz) including house currents of 50 or 60 Hz, often the following changes take place if the electromagnetic field intensity is between 5 V/meter and about 100 V/meter: 1) increase in Thromboxane B2 which indicates the presence of microcirculatory disturbance; 2) increase in Oncogene C-fos AB2; 3) decrease in Acetylcholine; 4) decrease in NO. Of these changes, the latter 3 constitute 3 coexisting factors for cancer and precancer. However, when the ELF electromagnetic field intensity is extremely high (more than 100 to a few hundred V/meter) Integrin $\alpha_5\beta_1$ also increases significantly. When the frequency is increased to the range of about 50 MHz or higher, the following body changes become distinctive: 1) marked increase in Oncogene C-fos AB2; 2) marked increase in Integrin $\alpha_5\beta_1$; 3) marked decrease or disappearance of Acetylcholine; 4) marked decrease or disappearance of NO. Above 0.1-0.5 GHz, these changes become very significant. These changes at extremely high frequency exposure constitute 4 of the 6 coexisting factors in cancer and precancer. If a part of the human body is exposed 5 minutes to a cellular phone within a distance of 5 cm, the effect usually lasts 5 minutes or longer after discontinuation of exposure. But with higher frequencies, stronger intensities, and shorter distances, these undesirable effects on the human body often last longer than the exposure time. Therefore, exposure to cellular phones in transmission mode as well as microwave ovens can produce these changes in the human body. If the exposed part of the body has localized deposits of heavy metal, each metal atom serves as a micro-antenna and absorbs the electromagnetic field from its surroundings. As a result cells in the area receive enhanced side effects of the electromagnetic field compared to tissue without heavy metal. In addition, if the metal happens to be Hg it constitutes one of 2 remaining factors for the existence of cancer or precancer. If the area happens to have viral infection in addition to Hg, all the necessary conditions for the existence of cancer and precancer are provided. Our previous studies also indicated that when viral infection and heavy metals such as Hg coexist locally, uptake of effective antiviral agents in the affected areas is very low and usually cannot reach therapeutic levels. In these cases, use of one of the several selective drug uptake enhancements discovered by the author can improve drug uptake in the pathological areas. However, the author found that in the combined presence of Hg and viral infection,

most antiviral as well as antibacterial effects will be inhibited. One of the major common sources of Hg in the human body is from dental amalgam. Since 1994, we have been able to remove deposited Hg from body tissue using cilantro. In order for an electromagnetic field to contribute to the genesis of cancer, the frequency of the electromagnetic field must be extremely high and exposure must be sustained for many hours every day. While searching for potential sources of electromagnetic fields that would satisfy these conditions, the author discovered that a majority of patients with cancer or cardiovascular disease were subjected to strong extremely high frequency electromagnetic fields in the home environment. A number of different sources for the extremely high frequency electromagnetic fields were detected. The most common of these in the United States and Europe were generated by mattress springs when the tips of the metal coils were bent in an outward direction towards the sleeping person. In safe mattresses, the tips of the metal coils should not be directed towards the people sleeping. In Japan the most common sources were spring mattresses or sources under the ground transmitted through tatami mattresses. In some cancer case, the author found 2 or more residents who had slept consecutively in the same location for periods of more than 7-10 years developed identical cancers. Examination of the area where the cancer patients spent a major part of 24 hours every day revealed that under the bed where the patients slept, corresponding to the location of the cancer, there were strong electromagnetic fields whose frequencies were estimated to be extremely high. In patients repeatedly exposed to such electromagnetic fields penetrate from one-side of the body to opposite side. When more than one such band-like electromagnetic field exists under the bed, at the intersection of the fields, the field is strongest and often the strongest field almost exactly corresponds to the location of pathology in the patient such as cancer. These electromagnetic fields could not be detected with standard commercially available electrical field meters or electromagnetic field meters which measure a limited frequency range of either less than 400 KHz or less than 10 GHz. Examination with a very sensitive electromagnetic field instrument that measures up to 22 GHz also failed to detect abnormal electromagnetic fields. These fields can be easily detected using Bi-Digital O-Ring Tests with a combination of electromagnetic field shielding methods employing various layers metal sheets with or without grounding. These extremely high frequency electromagnetic fields not only contribute to cancer but also contribute to the genesis of cardiovascular disease such as myocardial infarction and stroke. If patients are resting at home on a bed that is part of the problem, not only do the electromagnetic fields contribute to the development of their pathologies but they often inhibit drug uptake in the pathological areas. These abnormal extremely high frequency strong electromagnetic fields can be easily detected and prevented using the Bi-Digital O-Ring Test. Therefore, examination and treatment of cancer, cardiovascular, or stroke patients should also include examination of their beds, where they spend a large portion of their time.

References

1. Omura, Y., Losco, Bro. M., Electro-magnetic fields in the home environment (color TV, computer monitor, microwave oven, cellular phone, etc.) as potential contributing factors for the induction of Oncogene C-fos Ab1, Oncogene C-fos Ab2, Integrin $\alpha_5\beta_1$ and development of cancer, as well as effects of microwave on amino acid composition of food and living human brain. Acupuncture & Electro-Therapeutics Research, The International Journal, Vol.18, No.1, pp.33-73, 1993.
2. Omura, Y., Loberboym, M., & Beckman, S., Radiation Injury & Mercury Deposits in Internal Organs as a Result of Thallium-201 Intravenous Injection for SPECT Imaging; Additional Biochemical Information Obtained in the Images of Organs from SPECT or PET Scans; and Potential Injury Due to Radiation Exposure During Long-Distance Flights. Acupuncture & Electro-Therapeutics Research, The International Journal, Vol.20, No.2, pp.138-148, 1995.
3. Omura, Y. & Beckman, S., Role of Mercury (Hg) in Resistant Infections & Effective Treatment of Chlamydia Trachomatis and Herpes Family Viral Infections (and Potential Treatment for Cancer) by Removing Localized Hg Deposits with Chinese Parsley and Delivering Effective Antibiotics Using Various Drug Uptake Enhancement Methods. Acupuncture & Electro-Therapeutics Research, The International Journal, Vol.20, No.3 & 4, pp.195-219, 1995.
4. Omura, Y., Shimotsuura, Y., Fukuoka, A., Nomoto, T., Significant Mercury Deposits in Internal Organs Following the Removal of Dental Amalgam, & Development of Pre-Cancer on the Gingiva and the Sides of the Tongue and Their Represented Organs as a Result of Inadvertent

Exposure to Strong Curing Light (Used to Solidify Synthetic Dental Filling Material) & Effective Treatment: A Clinical Case report, along with Organ Representation Areas for Each Tooth, Acupuncture & Electro-Therapeutics Research, The International Journal, Vol.21, No.2, pp.130-160, 1996.

Electromagnetic Fields; Activation, Guidance and Interferences of BCEC-Systems (Part one)

Björn E.W. Nordenström, M.D., Ph.D., F.I.C.A.E. Prof.Emeritus and Former Director of Diagnostic Radiology, Karolinska Institute Stockholm, Sweden;Former Chairman, Noble Assembly for Physiology and Medicine, Karolinska Institute

Abstract

Dr. Omura, Dr. Shimotsuura, Thank you for your kindness to invite me again to the Symposium of the Bi-Digital O-Ring Test. It will be interesting to take part in the research of its functional background. Personally I believe that the O-Ring Test originally found and developed by Prof. Omura, Y. of New York is connected to a still unrecognized vector of the Electromagnetic Field. My presentation today will deal with Electromagnetic Field-Activation, Guidance and Interferences of BCEC ? Systems.

Fourteen years ago a biologic circulating system was described and called Biologically Closed Electric Circuits(BCEC)

It represents an analogue to the closed circuit transports of electricity in metal cables we encounter in daily life. When we turn a switch we get light in light bulbs, activations of electrical motors, etc. The electricity in such “technological” contraptions is based on closed circuit flow of an electromagnetic field which makes co-transport of charged particles. The charged particles in the “technological” contraptions are electrons why this electricity may be called “**Electronic Electricity**”. In the BCEC-systems the electromagnetic field makes co-transport with ions and might be called “**Ionic Electricity**”. The closed circuit transport takes place in electrolytic channels. “Technological” switches, amplifiers, resistors, capacitors, electrodes, rectifiers, etc have their analogues in the BCEC-systems.

The electromagnetic field is a common factor of both systems. A continuation of the book on BCEC will therefore be presented with some examples focusing on electromagnetic interactions on BCEC-systems. The EMFs exist everywhere and tend to expand in closed circuits .At condensation of the EMF particles (matter) is formed. Moving charged particles with an EMF produces new electrical fields and new magnetic fields. The expansion of a field occurs in spirals (vortices).

The production of anodic and cathodic vortices is shown in an in vitro system.

The effect of quenching of an anodic and cathodic field is demonstrated, leading to liberation of field transported particles, which precipitate and act on “their own” by concentration forces and interaction of opposite charges. Water molecules are formed in this way. The interaction of an applied field and dielectric grains leading to structuring is demonstrated.

Typically, the interstitial and vascular flow of ions led by field summation to development of a corona extending at the skin surface of man. Emotional reactions in man lead to enhanced Em’s with strong corona formation at the skin surface shown in Kirlian photographs.

Moving EMFs over a conductive ring (metal or electrolytic) induce electric currents. The vessels and interstitial fluids form “rings” defined as ,BCEC-systems. The motion of a hand (with its corona) over the vessels of the tail of an anaesthetized rat induces internal 4 mV fluctuations in the abdomen of the rat.

In neuromuscular activations a BCEC-system called the Vascular-Interstitial-Neuromuscular Circuit (VINMC) is activated from the brain by its bombarding of the circuit along axons with EMF-pulses leading to depolarization (activation) of the VINMC.

These events are indirectly demonstrated when a cow watches a field with green juicy grass. This signaling is also demonstrated by a cat taking a walk with the tail in “antenna position”, warning the animal for the danger of an attacking dog.

Electromagnetic Fields; Activation, Guidance and Interferences of BCEC-Systems (Part two)

Björn E.W. Nordenström, M.D., Ph.D., F.I.C.A.E. Prof. Emeritus and Former Director of Diagnostic Radiology, Karolinska Institute Stockholm, Sweden; Former Chairman, Noble Assembly for Physiology and Medicine, Karolinska Institute

Abstract

An EMF applied in a glass capillary with liquid paraffin between electrodes induces dipole moments (structuring) of the liquid. This is observable by applying perpendicularly to the capillary a white halogen light. A central “core” of structured molecules becomes visible. Also the halogen light produces vortexes of scattered small proportions. The electromagnetic field “packages” of the light interfere with the applied interelectrode field, lengthening structuring the liquid paraffin. By adjusting the two fields in two layers a texture is visualized by the use of the microscope light. By further adjusting the two fields each other **Chaos** is induced among the liquid paraffin molecules.

By applying capacitors to the anterior and posterior part of the chest with a cancer tumor in the lung chaos can be induced in the cancer tissue making it accessible for anticancer drugs. By changing the charge of the two capacitors the tumor can be made “spongy” by the “push and pull” EMFs of the capacitors. Rapid regression is shown of a large small cell carcinoma.

Closed circuit flow of electricity with the negative and positive fields adjacent to each other will lead to both field enhancement and counteractions (quenching). These effects studied in CPD-adenin blood show both Regressions and Proliferations of structures in the negative and positive fields. In a similar way is shown that Regressions and Progressions are produced in tissue specimens exposed to changing EMFs.

Origin of biomolecules has been described by Oparin and Orgel and experimentally tested by Miller who mixed H_2 , CH_4 , and NH_3 in water in a glass container and exposed the steam to electrical sparks. He could find amino-acids after some time. The theory has been criticized for the too low content of the materials in the sea. A theory is proposed that a closed circuit electrophoretic process in the sea might have compensated for the low initial concentrations. The circuit is proposed to be the precursor mechanism of the BCEC-systems and functions as a mechanism for proliferation.

The BCEC is described to transfer non-biological compounds into biological matter.

As all matter initially proliferates (Decays) to return to the origin - the EMF to circulate is the basic force which drives EMF-originated matter to continue in a never stopping eternal circulation.

静電磁場及び通電の抗腫瘍効果

中島宏昭、M.D., Ph.D.

昭和大学医学部第一内科客員教授、東京都立荏原病院内科部長

静電磁場が病巣部の血管を拡張し、薬物の移行を促進させることを前回の本シンポジウムで報告したが、その効果は静電磁場の大きさによって異なる可能性があり、今回は静電磁場の大きさと

薬物の腫瘍内への移行及び腫瘍縮小効果を動物を使って検討した。また、腫瘍に直接電極を挿入して通電し、腫瘍組織に影響を与えるか否か、ヒトの皮膚への転移性腫瘍で試みる機会があったので報告する。

1) 静電磁場の大きさと薬物の腫瘍内移行の変化

生後 6 週の雄 Donryu rat の腹部皮下に吉田肉腫細胞 5×10^6 個を植え、7 日目に腫瘍径が約 20mm になったところで 4 群に分け、第 1~3 群には各々 6V の直流を直径 2 cm のコイルを通じて生じた各々 5、10、15mG の静電磁場を 60 分加え、残りの 1 群は静電磁場を加えないコントロールとした。麻酔後腫瘍部に各大きさの静電磁場を 60 分加えた後、尾静脈から塩酸ドキソルビン（アドリアマイシン、ADM）1mg/kg を注入し、15 分後に屠殺して腹膜腫瘍部と腹膜健常部を摘出した。各々の組織内 ADM 濃度を測定し、濃度比を（腫瘍部 / 健常部、%）算出した。結果は 5mG 群の濃度比は 156%、10mG 群 152%、15mG 群の濃度比は 123%、コントロール群 117% で 5mG 群と 10mG 群でコントロールに比べ、有意に腫瘍内 ADM 濃度が上昇していた。

2) 転移性腫瘍に対する通電の効果

右下腿の悪性繊維性組織球種(Malignant fibrous histiocytoma, MFH)が右上腹部の皮膚に転移した 50 歳の男性（医師）の希望で、皮膚への転移性腫瘍（47×41mm）に電極を挿入して通電し、腫瘍の縮小効果をみた。腫瘍の右 2/3 の中央に + の電極針、約 2cm 離れた腫瘍辺縁部に - の電極針を深さ 5mm まで挿入し、1.0~2.0V、2.0~2.7mA で、15 分づつ、4 日間通電した。電極の位置は、毎日変更した。結果は通電後 6 日目に腫瘍径は 50% にまで縮小したが、その後再び増大した。剖検時の腫瘍の組織をみると、通電部は完全に壊死に陥っていたが、非通電部は組織内の細胞が粘液水腫様で細胞密度が粗であった。一方、肺に転移した通電と全く関係ない組織をみると核も紡錘形の細胞質も明瞭で、細胞も密に集合しており、通電部とは明らかに異なる所見を示していた。これらの結果から、静電磁場は腫瘍内への薬物の移行を増大させるが、その程度は大きさに単純に比例するわけではなく、病変や生体の状態に応じて適切な大きさがあるように考えられた。また、腫瘍内に電極を刺し、通電することによって腫瘍細胞が壊死に陥ることが確認されたが、その機序については不明である。

バイ・デジタル O-リングテストによる大腸の癌反応陽性患者 327 症例にみられた癌反応部 546 病変のスタンダード医学検査 (注腸 X 線・大腸内視鏡検査及び病理組織学的検査)による評価

井手耕一^{*}、M.D.、下津浦康裕^{**}、M.D.,F.I.C.A.E.、大村恵昭^{***}、M.D.,Sc.D.,F.I.C.A.E.、峯苔智明^{*}、M.D. ^{*}聖マリア病院、^{**}下津浦内科医院、ORT 生命科学研究所 ^{***} ニューヨーク心臓病研究ファウンデーション

目的：バイ・デジタル O-リングテスト (ORT) により大腸に癌反応陽性と考えられる病変を現代医学的スタンダード検査によって診断を明らかにし ORT による癌反応の信頼性を検討する事を目的とした。

対象：1995 年 4 月 10 日から 1997 年 8 月 31 日までに下津浦内科医院外来を受診した 21 才から 87 才までの ORT による大腸の癌反応陽性患者 327 症例（男性 136 例、女性 191 例）の癌反応部 546 病変を対象とした。

方法：様々な訴えで来院した患者の大腸に ORT による Oncogen C-fos AB2 反応陽性、Integrin $\alpha_5\beta_1$ 反応強陽性、水銀反応強陽性、ウイルス強陽性、Acetylcholine 反応準陰性の癌診断に必要な 5 つの反応を満たした部位を ORT イメージング法により描出した。その患者にスタンダード医学検

査（注腸X線・大腸内視鏡検査及び病理組織学的検査）による評価を行った。ORTと内視鏡を同じ医師により施行したA群と、別々の施設の医師により施行したB群に分けて検討した。

結果：1. ORTによる癌反応陽性病変数は、A群（ORT施行と同じ医師が内視鏡に当る）281例（男114・女167）で、455病変であり、B群（ORT施行と別の施設の医師が内視鏡に当る）46例（男22・女24）で、91病変であった。2. ORT癌反応陽性部の病変一致率は、A群（68.5%）、B群（67%）であった。3. A群の病理組織学的検査結果は大腸癌6病変（1.9%）、大腸腺腫性ポリープ157病変（50%）、過形成ポリープ114病変（36.5%）、炎症性ポリープ31病変（10%）、発赤5病変（1.6%）、カルチノイド2病変（0.6%）で、癌と腺腫性ポリープ、カルチノイドをあわせると一致したのは165病変（52.2%）であった。

考案：ORTによる癌反応部にはORTの結果を知らない医師による内視鏡検査でも高頻度に隆起性病変が認められるが、癌は少数であった。しかし、腺腫性ポリープを前癌状態と考えれば半数以上に癌反応部を診断できた。今回ORTで癌反応陽性とした部位に細胞レベルの癌及び前癌状態の存在は否定はできない。ORTは癌及び前癌状態のスクリーニング検査として有用な診察法であると考えられた。

〒830 福岡県久留米市東町 496

TEL 0942-36-0620

呼吸器疾患における Bi-Digital O-Ring Test の癌反応陽性の頻度と 異常部位の Acetylcholine の量の測定の臨床的意義

青木 隆幸,M.D. 熊本県 玉名地域保健医療センター 内科

【目的】呼吸器疾患の診断におけるニューヨークの Prof.Omura, Y.によって創始された Bi-Digital O-Ring Test (ORT)の有用性を評価することを目的に、各種疾患における ORT の癌反応陽性の頻度を検討し、さらに各症例の異常部位の Acetylcholine の量を測定した。【対象と方法】胸部X線写真で異常陰影を認めた101例を対象とし、全例X線学的、細菌学的、病理組織学的なスタンダード医学検査で診断を確定した。ORTによる癌反応陽性の判断は、Oncogene C-fos Ab2, Integrin $\alpha_5\beta_1$, 水銀の各反応強陽性、Acetylcholine 反応陰性、ウイルスの存在の5つの反応を満足する場合に癌または前癌状態とする Prof. Omura, Y.の方法によった。Acetylcholine の濃度別サンプルを作成し、ORTを用いてその量を測定した。

【結果】(1)肺癌25例全例が癌反応強陽性を示し、ウイルス肺炎26例中24例、特発性間質性肺炎7例中2例が癌反応陽性の5つの条件を部分的に満たした。(2)ウイルス肺炎2例と特発性間質性肺炎5例、さらに細菌感染19例、非結核性膿胸4例、結核性疾患14例、器質化肺炎3例とサルコイドーシス3例は全て、癌反応陰性であった。(3)ウイルス肺炎26例中24例、特発性間質性肺炎7例中2例は、Acetylcholine 反応陰性、ウイルスの存在(+)であったが、Oncogene c-fos Ab2, Integrin $\alpha_5\beta_1$, Hgの各反応が3～4個のO-リングを開く弱陽性であり、これらと比較して6個又は7個のO-リングを開く強陽性を示した肺癌と区別できた。(4)Acetylcholine 反応陽性を示す異常部位は500 μ gのサンプルと反応した。Acetylcholine 反応陰性を示す異常部位の同物質の量は500 μ g以外のサンプルの1 μ gから5mgまでの広い範囲に分布した。(5)肺の感染症の予後良好な例では病状の改善とともにAcetylcholine の量が減少していく例が多かった。予後不良例では、病初期からAcetylcholine が極めて高値か、病気の経過とともに増加していく例が多かった。

【考察と結果】肺癌の全例が癌反応強陽性であった。このことは、ORTは癌のスクリーニングに有用であるが、診断を確定するためにはスタンダード医学検査の成績を参考にしなければならないことを示している。肺の感染症では、炎症の強さの程度によりAcetylcholine の量が異なっ

た。この結果は肺感染症の異常部位における Acetylcholine の量の測定が感染症の予後の推測に役立つことを示唆している

〒865 熊本県玉名市玉名 2172 . 0968-72-5111 FAX . 0968-73-4919

Laser and Bi-Digital O-Ring Test in Rehabilitation Medicine

Pekka J.Pöntinen,M.D.,Ph.D., F.I.C.A.E., F.A.C.A.* Assoc. Prof. of Anesthesiology, Kuopio University;Director, Acupuncture Research Project, Dept. of Physiology,Kuopio University, Kuopio, Finland.Former Medical Director, Kankaanpää Rehabilitation Center, Kankaanpää, Finland Editor in Chief, Scandinavian Journal of Acupuncture & Electrotherapy: Editor, Acupuncture & Electro-Therapeutics research, the International Journal; Editor, AKU, Akupunktur, Theorie und Praxis Member of the International Advisory Board, Physical Medicine Research Foundation, Vancouver, B.C., Canada

Abstract

As reported in the 1st International Symposium on the Bi-Digital O-Ring Test in 1993 the benefits of the Bi-Digital O-Ring Test originally developed by Prof. Omura, Y. of New York, obvious in acute neck and shoulder pain. The same technique using very low energy laser irradiation (0.05 - 0.1 J/ point at skin level) to the abnormal area located by the Bi-Digital O-Ring Test and followed by finger pair and whole hand muscle force testing bilaterally and by improvement in whole hand grasping force. It is very important to understand that the test dose is not yet a treatment, although functional improvement can be strikingly good. This is particularly true when locating the abnormal nerve root irritation in cervical and/or lumbar region. A typical effective dose to correct dysfunction and pain originating from nerve root irritation caused by disc protrusion or spondylarthrotic changes is 2-4 J/ point at skin level. In lower extremities muscle force changes can be checked comparing extension strength in toes before and after a test dose.

Similar response can be seen after superficial (i.c.) needling at the same locations. Therapy resistant pain and dysfunction is often the same locations. Therapy resistant pain and dysfunction is often seen under prolonged stress leading to impaired immune response and recurrent infections. Irradiation of blood by laser light has been shown to change blood cell counts and improve tissue survival under stress. Bi-Digital O-Ring Test can be applied to lower manubrium sterni, the thymus representation area, to check the functional state of the immune system. Transcutaneously given low energy laser irradiation to radial artery provides a possibility to check the optimal laser parameters for immune system enhancement when indicated.

Address corresponding to: Pikkusaarenkuja 4 B 77, FIN-33410 Tampere, Finland.Fax: +358-3-3462441

Bi-Digital O-Ring Test and Microwaves : Microwave Resonance and Circulation an Explanation for Organ Representation at Extremities, Acupuncture Meridians and Points, Microwave Treatments.

Andre De Smul,M.D., F.I.C.A.E. Prof. Emeritus of Department of Surgery;Vrije (Free) University of Brussels Belgium

Abstract

Our body is an excellent antenna receiving and emitting electro-magnetic waves and fields.Certain wavelengths have a better uptake because they are in resonance with the electro-magnetic waves and fields of tissues and organs : we have a “window” for cm and mm waves: they play an important role at very low intensities, near the quantum of energy. Ukrainian and Russian scientists showed that the resultant of all electro-magnetic activities in our body is a small number of coherent (in faze like a laser)

mm microwaves circulating permanent in the body along non-material pathways known since centuries as acupuncture meridians. At the extremities there is a reflexion, direct and reflected waves interfere and generate a holographic image, a micro-system that can be shown by an electro-magnetic resonance technique like the Bi-Digital O-Ring Test (originally developed by Prof. Omura, Y.) ,extremities (hands, feet, ears, tongue.....) are like screens on the internet system of our body and available for diagnosis and treatment with bioresonance techniques. All substances, tissues, organs have specific electro-magnetic patterns in the microwave range and can induce resonance in the body, even under the form of microscopic slides.

When resonance occurs our autonomous nervous system transduces the uptake

- with a transient muscular reaction (+ or -)
- Bi-Digital O-Ring Test
- Lecher antenna reaction
- with a transient vascular reaction
- pulse of Nogier
- skin impedance
- with tiny sensitive feelings

In this approach disease can be seen as an impairment of communication in our internet system. Treatment given under the form of appropriate microwaves (MRT, Qi-Gong) will restore the circulation. The results of MRT (Microwave Resonance Therapy) are astonishing. Microwave resonance is the gate to the medicine of the next century. We are waiting for a tremendous development of technological aids in screening, recording and emitting very low intensity microwave patterns in the mm range. At the same time leading people must become aware of the necessity to prohibit or limit the abuse of these waves with high intensities.

Bi-Digital O-Ring Test in the Substantiation of the Millimetre-Wave Bioresonance Therapy

Victor P. Lysenyuk, M.D., Sc.D., F.I.C.A.E. Professor & Chairman, Dept. of Non-Orthodox Medicine,
National Medical University, Kiev, Ukraine

Abstract

Scientific evidences concerning a key role of intrinsic electromagnetic fields in a number of essential functions have accumulated. They include embryonic morphogenesis, wound healing, bone remodeling under the mechanical stress, some aspects of immune and hormonal responses, information transmission in the nervous system. These processes may be influenced significantly by external sources of electromagnetic radiation even at the very low-intensity level. The pronounced sensitivity of the body to the extremely low frequency range (0.1 - 1,000 Hz) and the microwave range (100 MHz - 100 GHz) attracts an attention because of, on the one hand, possible health hazard for different persons exposed to those fields in the course of their occupations, on the one hand, possible health hazard for different persons exposed to those fields in the course of their occupations, on the other hand, the challenge to the latest theories on interaction between electromagnetic radiation and living tissue. The weak fields have been observed to produce chemical, physiological and behavioral changes only within windows in frequency and intensity based on non-linear wave phenomena. According to the recognized soliton theory for interactions between protein molecules in living tissue and electromagnetic fields, there exists an opportunity to predict resonances in submillimetre wave bands. Possibility of such an influence on

metabolic processes stimulated the development of a new method of treatment with the aid of electromagnetic generators in the millimetre wavelength range, corresponding to 30 - 300 GHz frequencies. Experience of clinical application of the millimetre-wave bioresonance therapy showed its efficiency for the regulation treatment and improvement of the body resistance. Since in the Soviet Union the most strict standard of $0.01 \text{ mW} / \text{cm}^2$ for maximum safe microwave exposure to avoid undesirable influence on brain activity was established (for comparison in the U.S.A. the microwave safety standard of $10 \text{ mW} / \text{cm}^2$ for 15 GHz - 300 GHz to avoid cataracts due to the thermal effects), the device for the millimetre-wave bioresonance therapy worked at the extremely low intensity level orders of magnitude far less than $0.001 \text{ mW} / \text{cm}^2$. As regards, power of the electromagnetic radiation is of no particular significance from the information point of view. However in our supposition, it should be considered more correctly as an existence of certain energy threshold for the information electromagnetic action during the millimetre-wave bioresonance therapy. Using the Bi-Digital O-Ring Test (originally developed by Prof. Omura, Y., New York), estimation of energy thresholds for bioresonant state was performed objectively in 14 patients with verified gastric ulcers in the course of the millimetre-wave bioresonance therapy. The standard electromagnetic generators in the millimetre wavelength range (25 - 80 GHz) and 10 mW output were applied. With the aid of the special attenuator ST-36 acupoint was stimulated from the distance 5 mm at the different power densities (10^{-2} - $10^{-10} \text{ mW} / \text{cm}^2$) after determination of the individual bioresonant frequency. According to the data obtained, energy threshold varied from 10^{-4} to $10^{-8} \text{ mW} / \text{cm}^2$ for different individuals and different days of investigation for the same patient. The slight displacement (25 mm) of electromagnetic stimulation from ST-36 acupoint facilitated a sharp rise of the thresholds for each patient. At the power density level of 0.001 - $0.01 \text{ mW} / \text{cm}^2$ individually, induction of circulatory disturbances with increase in Thromboxane B2 and decrease in Acetylcholine as well as appearance of precancer substances Oncogene C-fos Ab2 and Integrin $\alpha_5\beta_1$ were revealed. Analysis of the results showed an existence of the individual energy thresholds of bioresonant state which can fluctuate considerably. Its magnitude under circumstances of the synchronizing information signal may depend on the specific molecular mechanisms of interaction between an external field and cellular oscillators, the modulation and time parameters of electromagnetic fields, the noise level in the biological system as well as difference in frequencies between the synchronizing and synchronized oscillators. Energy thresholds tend to diminish in case of the favorable combination for these factors. Also energy thresholds are influenced by the space parameters of electromagnetic stimulation that is now understood as precise coordinates of acupuncture system. Application of the Bi-Digital O-Ring Test provides the necessary individualization of regimes and parameters for the millimeter-wave bioresonance therapy with objective evaluation of its effects which is important for the further development of this non-orthodox treatment.

Bi-Digital O-Ring Test As A Diagnostic And Prognostic Aid In Fibromyalgia

Pekka J. Pöntinen, M.D., Ph.D., F.I.C.A.E., F.A.C.A.* Assoc. Prof. of Anesthesiology, Kuopio University; Director, Acupuncture Research Project, Dept. of Physiology, Kuopio University, Kuopio, Finland. Former Medical Director, Kankaanpää Rehabilitation Center, Kankaanpää, Finland Editor in Chief, Scandinavian Journal of Acupuncture & Electrotherapy: Editor, Acupuncture & Electro-Therapeutics research, the International Journal; Editor, AKU, Akupunktur, Theorie und Praxis Member of the International Advisory Board, Physical Medicine Research Foundation, Vancouver, B.C., Canada

Abstract

Fibromyalgia is a multifaceted symptom complex difficult to define exactly and even more problematic to give a long term prognosis. In June 1994, under the auspices of the Physical Medicine Research Foundation, a committee of fibromyalgia (FM) experts was convened at the University of British Columbia, Vancouver, Canada to address issues of diagnosis, testing, assessment, and prognosis. The consensus statement and the committee's recommendations for the future research were published in 1996 in The Journal of Rheumatology(1). The American College of Rheumatology (ACR) criteria for the classification of FM require generalized musculoskeletal pain and the presence of pain on palpation of 18

specified tender point sites. Other typical symptoms include fatigue, sleep disturbance, mood disturbance, headache, irritable bowel symptoms, among others. Tenderness at sites not specified by the ACR criteria does not exclude diagnosis. Although no specific laboratory testing is currently available in FM, some abnormalities do exist. These include high substance P (SP) content in CSF (2,3), abnormality in serum serotonin (4,5), a highly significant decrease in somatostatin C (6), and a reduced regional blood flow and a decrease in glucose metabolism in the hypothalamus and the caudate nucleus demonstrated by single-photon-emission-computed tomography (SPECT) (7). Our study group at the University of Kuopio has been able to confirm these SPECT findings in FM. Alavi and his associates reported of changes in the regional cerebral blood flow in thalamus after superficial needling of acupuncture points which had been effective on previous treatments (8). We reported in the 1st International on the Bi-Digital O-Ring Test in 1993 the benefits of the Bi-Digital O-Ring Test originally found and developed by Prof. Omura, Y. of New York in acute neck and shoulder pain (9). The defined technique using low dose laser irradiation (0.05-0.1 J/point) to the abnormal area located by the Bi-Digital O-Ring Test and followed by finger pair and whole hand muscle force testing in the basis for functional diagnosis of cervicobrachialgia. The common trigger areas in the edge of upper trapezius muscle may compromise the functional state of the intracranial circulation (10,11). In order to select the optimal wavelength and/or frequency for the laser irradiation the test dose can be directed to the TPs in the upper trapezius. In our preliminary trial using low energy infrared irradiation (LEII) on typical trigger areas in upper trapezius and C7 region either a significant increase or decrease in rCBF was recently quantified with SPECT in three myofascial pain patients (12). According to Omura the functional state of patient's representation immune response can be checked by testing the thymus representation area (lower half of manubrium sterni) (13). Instead of irradiating the thymus representation area we have given a test dose of 0.1-0.2 J transcutaneously to radial artery and checked the lower manubrium sterni again. By checking the response after irradiation with different laser parameters (wavelength, power density, frequency, etc.) it is possible to define the optimal parameters for the treatment (total dose of 10-15 J). The other symptoms in FM should be tested at the corresponding organ representation areas.

References:

1. Wolfe F, and the Vancouver Fibromyalgia Consensus Group: The fibromyalgia syndrome: A consensus report on fibromyalgia and disability. *J.Rheumatol.* 1996,23,534-539.
2. Vaeroy H, Helle R, Forro O, Kass E, Ternius L: Elevated CSF levels of substance P and high incidence of Raynaud phenomenon in patients with fibromyalgia: New features for diagnosis. *Pain* 1988, 32, 21-26.
3. Russel IJ, Orr MD, Littman B, et al.: Elevated cerebrospinal fluid levels of substance P in fibromyalgia syndrome. *Arthritis Rheum.* 1994, 37, 1593-1601.
4. Russell IJ, Michalek JE, Vipraio GA, Fletcher EM, Javors MA, Bowden CA: Platelet 3H-imipramine uptake receptor density and serum serotonin levels in patients with fibromyalgia/fibrositis syndrome. *J.Rheumatol.* 1992, 19, 104-109.
5. Stratz T, Samborski W, Hrycaj P, et al.: Serum serotonin concentrations in patients with generalized tendomyopathy (fibromyalgia) and rheumatoid arthritis. *Med. Klin.* 1993, 88, 458-462.
6. Bennett RM, Clark SR, Campbell SM, Burkhardt CS: Low levels of somatostatin C in patients with the fibromyalgia syndrome ? A possible link between clop and muscle pain. *Arthritis Rheum.* 1992, 35,1113-1116.
7. Mountz JM, Bradley LA, Modell JG, Alexander RW, Triana-Alexander M, Aaron LA, Stewart KE, Alarcon GS, Mountz JD: Fibromyalgia in women: abnormalities of regional cerebral blood flow in the thalamus and the caudate nucleus are associated with low pain threshold levels. *Arthritis Rheum.* 1995, 38, 926-938.
8. Alavi A, LaRiccia PJ, Sadek AH, Newburg AB, Lee L, Reich H, Lattanand C, Mozley PD: Progess report: SPECT scan imaging of the brain before and after acupuncture. *Acupuncture & Electro-Therapeut. Res., Int.J.* 1997, 22, 68.

9. Pöntinen PJ: Bi-Digital O-Ring Test as a diagnostic and prognostic aid in acute neck and shoulder pain. 1st International Symposium on Bi-Digital O-Ring Test, Tokyo May 7-9, 1993. Book of Abstracts, pp.49-50.
10. Omura Y: Normal and abnormal relationship between brain circulation estimated by supraorbital temperature measurement and grasping force of the corresponding hands: their clinical application for diagnosis and evaluation of various forms of treatment. Part I. Acupuncture & Electro-Therapeut. Res., Int.J. 1978, 3, 49-96.
11. Omura Y, Editorial:Non-invasive circulatory evaluation and electro-acupuncture & TES treatment of diseases difficult to treat in Western medicine: 1) abnormal brain circulation and blood pressure: Cephalic Hypertension Syndromes and their related conditions ? headache, insomnia, blindness due to macular degeneration & retinitis pigmentosa, and some psychiatric problems; 2) severe lower severe diabetic neuropathy. Acupuncture & Electro-Therapeut. Res., Int. J. 1983, 8, 177-255.
12. Pöntinen PJ, Vanninen E, Kuikka JT: Changes in brain regional cerebral blood flow (rCBF) induced by peripheral low energy infrared irradiation (LEII). Pain Management: Opportunities, Obstacles, and Outcomes. 16th Annual Scientific Meeting of American Pain Society, New Orleans October 23-26,1997.
13. Omura Y.: Highlights of forthcoming 1st International Symposium on Acupuncture & Electro-Therapeutics to celebrate the 10th anniversary of Acupuncture & Electro-Therapeutics Research, The International Journal. 1) Stress & Immunity and effects of stimulation of deep personal nerve at St 36 on ventricular arrhythmia, heart disease & sudden death. 2) New, simple, accurate and inexpensive imaging technique of internal organs and cancer tissue by a clinical application of "Bi-Digital O-Ring Test" and clinical significance of newly discovered networks of thymus glands in cancer treatment. Acupuncture & Electro-Therapeut. Res., Int. J. 1985, 10, 1-12.

Address corresponding to: Pikkusaarenkuja 4 B 77, FIN-33410 Tampere, Finland. Fax: +358-3-3462441

Toxoplasma gondii & Residual Symptoms

Keitiro Koga, M.D.*, Paulo L. Farber, M.D.**

* Professor and researcher, Scientific Acupuncture Study Center, São Paulo, Brazil **Professor and Coordinator, Acupuncture Research Department, University of São Paulo Medical School; Researcher, Obstetrics Division, Department of Obstetrics & Gynecology, University of São Paulo Medical School; Scientific Director, Brazilian Medical Association of acupuncture; Director, Scientific Acupuncture Research Center, São Paulo, Brazil

Scientific Acupuncture Study Center. Address: Rua Verissimo Gloria, 165. Sao Paulo - SP, 01251-140. Brazil E-mail: pfarber @uol.com.br

Abstract

Follow a treatment using Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) originally developed by Prof. Omura, Y. of New York, we found that in some patients the symptoms diminished but not disappeared. We studied 35 patients, 16 male and 19 female. Most of them had chronic pain - 27 patients, most common arthralgia (22.8% of all patients), cervical pain (17.1%), backache (14.2%), fibromyalgia (11.4%) and headache (8.6%). Other diseases were panic, allergies, epilepsy and Parkinson disease. Initially, most of patients had BDORT resonance phenomenon between two identical substances showing Chlamydia (trachomatis, psitacis or pinallyumoniae) (29 patients, 82.8% of all cases), Borrelia burgdorferi (62.8%), Cytomegalovirus (62.8%) and Herpes simplex virus (51.4%). After treatment, we found BDORT resonance between slides with culture of Toxoplasma gondii in all patients, then we speculated that Toxoplasma gondii can be a cause of residual symptoms. We treated the patients with Sulfadiazine + trimetoprim (94.3% of all cases) and/or Propolis (37.1%), and a drug uptake enhanced method (most

common (+) Qi-gong stored paper - 100% of all cases, acupuncture - 74.2% and strong shiatsu massage on organ representation area of hands - 28.5%). After treatment, 25 patients (71.4%) had no symptoms.

Conclusion: *Toxoplasma gondii* might be a cause of residual symptoms after eliminating other infections.

Major Causes of Intractable Pain and Their Effective Treatment Using the Bi-Digital O-Ring Test: Combined Use of Effective Anti-Microbial Agents, Cilantro to Remove Heavy Metals, and Drug Uptake Enhancement Method Selectively Deliver the Drugs to the Pathological Areas

Yoshiaki Omura, M.D., Sc.D., F.A.C.A., F.I.C.A.E. Director of Medical Research Foundation; President, International College of Acupuncture & Electro-Therapeutics; Visiting Research Prof., Dept. of Electrical Engineering, Manhattan College; Prof., Dept. of Non-Orthodox Medicine, Ukrainian National (former Kiev) Medical University; Former Adjunct Prof., Dept. of Pharmacology, Chicago Medical School

Abstract

According to the author's previous study using the Bi-Digital O-Ring Test, among the various types of intractable pain, the following most frequently encountered microorganisms play an important role in the pathogenesis of the pain: Herpes Simplex Virus Type I or Type II, α -Streptococcus, Lyme *Borrelia burgdorferi*, *Chlamydia trachomatis*, and *Toxoplasma gondii*. In general, infectious organisms will concentrate in a traumatized region of the body. In painful areas, Substance P always exists with increase in Thromboxane B2. The intractable pain involved in Herpes Simplex Type I or Type II viral infection has a characteristic distribution. Either type of the Herpes virus can be found between the midline of the spine and the midline in the front of the body, only on one side of the body. Neither of these viruses can cross the midline to infect the opposite side of the body at the same spinal level. When the pain due to these viruses becomes chronic intractable or chronic recurrent intractable pain, the infected area often contains local deposits of heavy metals such as Hg or Pb. These Herpes Simplex viruses are the major cause of intractable headache, migraine headache, chest pain, and pain in the extremities including cramps during sleep. The most effective antiviral agent is not Acyclovir, which is the most commonly used antiviral agent for the treatment of Herpes viruses in Western medicine. Using B.D.O.R.T, about 10 years ago the author found the most effective antiviral agent for Herpes family viruses to be a mixture of 180mg of EPA (Eicosa Pentaenoic Acid) and 120 mg of DHA (Docosa Hexanoic Acid) for the average adult. This mixture was also found to have an anti-cancer effect. However, in the presence of heavy metal deposits, even the effective medication cannot reach the infected area, and moreover, the antiviral effect of any medication which does reach the pathological area is inhibited by the heavy metals. α -Streptococcus infections are one of the most common causes of acute pain which can be treated most effectively with Wyeth(-Ayerst) amoxicillin, while Beecham amoxicillin is often ineffective. In the presence of heavy metals, the antibiotics cannot reach the infected area sufficiently in the presence of abnormally increased Thromboxane B2, and the drug effect will be inhibited by the locally deposited heavy metal. One of the most common causes of intractable pain in joints is Lyme Disease with or without mixed infection with *Chlamydia trachomatis*. We also found the most common cause of so called rheumatoid arthritis is a mixed infection of *Chlamydia trachomatis* and Lyme *Borrelia burgdorferi* for which standard treatment is the non-steroidal anti-inflammatory drugs. Such drugs do not treat the underlying cause of the arthritis but merely exert an anti-symptomatic effect. After many years of such treatment, patients often end up with permanent joint replacement with artificial joints, as well as the development of chronic stomach ulcers due to the side effects of these drugs. Dr. Paul Plotz, chief of the arthritis and rheumatism division of the National Institutes of Health (NIH), stated in 1997 that rheumatoid arthritis is both an autoimmune and a genetic disease. It is known that genes on Chromosome 6, which exist in the same vicinity as human leukocyte antigens (HLA), are related to rheumatoid arthritis. However, according to the B.D.O.R.T, Doxycycline or Erythromycin are effective for the treatment of *Chlamydia trachomatis*, and Wyeth(-Ayerst) Amoxicillin is very effective for Lyme *Borrelia burgdorferi*. However, when Erythromycin and Wyeth Amoxicillin are given together, due to drug interactions, both beneficial effects are cancelled. In contrast, a combination of doxycycline and Wyeth Amoxicillin is

compatible and these drugs will not inhibit each other but simply taking them orally will not reach therapeutic levels in the infected area of the joint. In addition, if heavy metal deposits (such as Pb or Hg) coexist in the infected area, the effects of the antibiotics are inhibited. Often the cause of the intractable pain of the neck around the occipital area and back of the neck is Lyme B. B. infection in the inter-vertebral disk with or without various degrees of disk herniation where localized deposits of Hg are often found. In many patients who have back pain due to herniation of the disk, if there is a localized single or mixed infection of virus (such as Herpes Simplex Type I or II) or bacteria (such as α -Streptococcus), Chlamydia T., or spirochetes such as Lyme B.B., after laminectomy the some of the patients with these infections experience no improvement of the pain and sometimes even a worsening of the pain depending on the extent of the existing infection. These infections are frequently undetectable by standard laboratory tests such as X-ray, MRI, or blood tests but can be easily detected by the Bi-Digital O-Ring Test. According to a lecture given by the president of the International Association for the Study of Pain at an international pain meeting held in Beijing in the summer of 1996, the involvement of infections in backache is less than 0.4%. This is contrary to the author's finding that the majority of patients (> 80%) with chronic backache have a local infection with one or more of the above mentioned microorganisms. Unfortunately backache costs both the patient and the government billions of dollars every year in both the United States and Japan. Chlamydia T. is a major cause of menstruation related severe pain and infertility. Some types of chronic headaches with dull or moderate persisting pain are produced by Toxoplasma gondii infection which can be effectively treated with Sulpha drugs. However, the presence of heavy metals also inhibits the effectiveness of this treatment. In 1994 the author discovered that cilantro can safely and effectively remove heavy metals such as Hg and Pb, as well as aluminum, and published these findings. When cilantro is used with effective anti-microbial agents in combination with the drug uptake enhancement method (by stimulation of accurate organ representation areas of hands or other parts of the body by one or more several stimulation methods to deliver the effective drug to specific organs where drug uptake was very low) discovered by the author in the early 1990s, some of the pain due to intractable infections often disappeared in a relatively short period of time, but some patients did not show any improvement. Further studies revealed that in most patients, even after confirming that drugs were reaching the pathological areas sufficiently after drug-uptake enhancement, shortly after the patient put on their underwear, the drug uptake practically disappeared. The cause of this phenomenon was found to be due to patients wearing underwear made of synthetic fabrics including labels. Some patients who were wearing 100% cotton underwear did not have drug uptake inhibition, but excessively bleached or dyed 100% cotton underwear inhibited drug uptake to the part of the body covered by the underwear. The author found that most brassiere as well as the labels on most underwear inhibit drug uptake. Eventually, the author found that any clothing that contacted the body surface that had B.D.O.R.T weakening effects, always inhibited drug uptake. Any clothes which strengthened the Bi-Digital O-Ring helped to enhance drug uptake in the area contacting the body. In some patients, in spite of the fact that their underwear did not inhibit the drug uptake, still no improvement was observed. In these patients, the author found that if there is a strong electro-magnetic field either in the area where the patient spends most of the day or in the bed where the patient sleeps, then drug uptake was also inhibited even when drug-uptake enhancement methods were incorporated. Metal jewelry caused drug uptake to be inhibited where they contacted the body or in the area surroundings the metal. Watches with positive polarity that touched the body inhibited the drug uptake in the same side of the body, particularly the chest. Metal earrings inhibited the drug uptake to the brain. Bracelets and metal rings also inhibited the drug uptake on the side of the body on which they were worn. By removing all these inhibiting factors, it has become possible to treat many patients with intractable chronic pain due to various intractable infections. However, even though the author succeeded in eliminating infection and pain, the pain returned in some patients within a few months. In these patients the author found that the infection disappeared from the original infected area accompanied by the disappearance of the pain, but if the drug uptake is concentrated only in the obvious pathologic area, bacteria and viruses hide in the nearest hiding places in the patient's body. So far, at least 6 hiding locations in the body have been discovered. In all of these hiding places, the author found the presence of Insulin-like Growth Factors I and II; the microorganisms appeared to utilize Insulin-like Growth Factors for their multiplication. In all of these hiding places, the coexistence of Hg was also found. Therefore, in order to eradicate a pain-causing infection completely, along with the administration of effective

anti-microbial agents and cilantro to remove Hg, one has to enhance the drug uptake to not only the pathological areas but also all of these hiding places by applying (+) Qi Gong energy stored paper or effective soft laser with wavelengths 670 nm or longer on the occipital area above the cardio-vascular representation area of the medulla oblongata. With these new approaches, many infections that are difficult to treat, which are also responsible for intractable pain, can often be treated very effectively.

Analysis of Bi-Digital O-Ring Test in Brazil

Paulo L. Farber, M.D.*, **Keitiro Koga, M.D.**** *Professor and Coordinator, Acupuncture Research Department, University of São Paulo Medical School; Researcher, Obstetrics Division, Department of Obstetrics & Gynecology, University of São Paulo Medical School; Scientific Director, Brazilian Medical Association of acupuncture; Director, Scientific Acupuncture Research Center, São Paulo, Brazil ** Professor and researcher, Scientific Acupuncture Study Center, São Paulo, Brazil Scientific Acupuncture Study Center. Address: Rua Verissimo Gloria, 165. Sao Paulo - SP, 01251-140. Brazil E-mail: pfarber @uol.com.br

Abstract

After Dr. Yoshiaki Omura workshop on Bi-Digital O-Ring Test (BDORT) hold in Sao Paulo, Brazil in November, 1995, we started investigating the validity and application of BDORT. Immediately after the workshop, we made a double-blind trial, using a microscopic slide with stomach and other microscopic slide with plain glass. Using an indirect BDORT, we pointed a metal probe at the stomach area (acupuncture point Ren 12) and tested in the force of O-Ring of a intermediary person who had no idea about what is happening, and although he was a doctor he had no knowledge about BDORT or acupuncture. Two microscopy slides were wrapped with paper, so that could be impossible to know what slide the intermediary person was holding. After 20 trials we realized that only one slide evoked resonance phenomenon: the slide containing stomach fragment. After that, we started researching BDORT. Nowadays we have three outpatient departments (Acupuncture Research Department, Sao Paulo University Medical school; Brazilian Medical Association of Acupuncture and Outpatient Department and Scientific Acupuncture Study Center) and about 40 private clinics making research about BDORT. As an example, we are able to show some results obtained in the two author's private clinics, and Outpatient Department and Scientific Acupuncture Study Center, between August, 1996 and April, 1997, as follows;

Patients: 165 (Male: 59 -35.76% Female: 106 -64.24%) Age (Mean \pm SD): 46.23 \pm 15.69. Duration of treatment: 48.14 \pm 24.55 days. Common Diagnosis: Chronic pain (124 patients, 75.15% of all) Common types of chronic pain: Arthralgia (30.65% of patients with pain), Headache (20.97%), Cervical pain (14.52%) and Backache (14.52%). Common results of BDORT: Chlamydia (psitaci, trachomatis or pneumoniae) (82.42% of all patients), Herpes simplex virus type 1 or type 2 (64.84%), Cytomegalovirus (59.39%), Lyme Borrelia burgdorferi (55.75%), Toxoplasma gondii (23.03%) and Helicobacter pylori (18.18%).

Common Drugs Utilized: Eicosapentaenoic acid + Docosahexaenoic acid (96.96%), Doxycycline (76.36%), Propolis (23.63%), Sulphadiazine + Trimetropin (23.03%) and Amoxiciline (11.51%).

Common Enhanced Drug Uptake Methods: (+) Qi-gong stored paper (92.12%), Acupuncture (76.36%) and Strong shiatsu massage at organ representation areas (30.90%).

Percentage of people with no symptoms at the end of treatment: 70.90% Patients whose symptoms improved more than 80%: 15.85%

Conclusion: BDORT is a valid and potential method of diagnosis and therapeutic. We believe that with BDORT we are able to make a revolution about treatment in a lot of pathologies.

高齢社会における先制医療を促す BDORT 医学

無敵剛介, M.D., Ph.D., F.I.C.A.E. 久留米大学医学部名誉教授、医療法人聖峰会田主丸中央病院
会長

高齢社会を迎え、近代西洋医学・医療の分野ではそのめざましい進歩にも拘らず、必ずしも満足すべき成果を上げ得ず、医師は患者ないし、疾病に対してもっと新しい対応が余儀なくされている。したがって、このような現代医療社会の中では、患者を含むチーム医療メンバー相互のより緊密な連携役割と、それを正しく推進するための互いのニーズの確認が必要であるのと同時に、より質の高い医療を展開するため□フィジカル□サービスそして□コストファイナンスのそれぞれの成果を適正に確認し合う努力が必要である。そこで医療従事者は、奉仕の精神（vigilance）をもって患者の心に触れる努力がなされなければならない。（サイコキネシス¹⁾）とくに複雑な病態を有して難治の患者である高齢者にはきわめて慎重な「医の心」の対応が必要となり、上記の outcome を考えながらの診断・治療へと進むこととなる。すなわち「医の心」を理解するには、ニューヨークの Prof. Omura, Y. によって発見された Bi-Digital O-Ring Test (BDORT)を用いて患者に定着し、その病態の分析結果を素早く的確に読みとる事が必要であり、他のチームメンバーと共に適正、的確な医療情報として定性的、定量的に患者にも提示される事が大切である。本来、未病気医療とは先制医療に通じるものでなければならない。BDORT を用いて患者から直接得られる生体情報は、未だ西洋医学的には得られない有用な clinical evidence としてチーム・メンバーと共に確認されることとなる(先制的 EBM)。今後の BDORT 医学の研究は、現代医学の中では最も先制的で且つ分子生物学的更に量子力学的要素をも含む新しい医療情報を次々と提供し、現代西洋医学・東洋医学を超えての更に包括的且つ斬新的東西共生医学・医療を促し今後の高齢社会に未曾有の貢献を果たすことができるものと考えている。

文 献

1. ジョセフソン B . D . ほか：量子力学と意識の役割（竹本忠雄監訳）166P.たま出版、1989年

新たなストレスケアシステム（BOOCS）の肥満治療への応用とO - リングテストとの関係

藤野武彦, M.D., Ph.D. 九州大学健康科学センター助教授〒816 春日市春日公園6—1, 福岡

1. はじめに 肥満は、脂肪の沈着の結果として種々の成人病をもたらすことと、肥満者が日本やアメリカで激増していることはよく知られている。そして、その治療法であるカロリー制限療法（エネルギー摂取の低下）と運動療法（エネルギー消費の増大）が多数の人に応用されながら、極めて低い成功率であることが明らかになってきた。これらの方法がなぜ成功しないか。その理由の大半は、「食べるから太る」という正当な事実から導きだされた「だから食べるな」という論理が何の疑いもなく、正しいと錯覚されている所にある。一方、著者はストレス過剰から肥満などの成人病が生じるメカニズムとして「脳疲労」仮説を提唱すると共に具体的な脳疲労解消法を開発した。それが、Brain Oriented Oneself Care System(BOOCS: ブックス) = 脳指向型セルフケアシステムと呼ぶ新たなストレスケアシステムである。今回、これを肥満治療に用いることの意義とニューヨークの Prof. Omura, Y. により創始・開発されたバイ・デジタルO - リングテストを同時に応用することの有効性について報告する。
2. BOOCS (ブックス) の基本原理 ブックス法は、運動したくない人には強制しないし、甘い物を食べたい人にはそれを禁止することはしない。代わりに、心地良さを味わうことを積極的に目指す。その理由は「脳疲労」は大脳新皮質と大脳旧（古）皮質の関係性の破

綻と、その結果としての視床下部の機能不全であり、その修復に上記方法が極めて有効であると考えられるからである。

基本原理、基本原則をまとめると下記の通りである。

1. 2つの基本原理

(1) 自分で自分を禁止・抑制することをできるだけしない。(禁止・禁止のルール)

(2) 自分にとって心地良いことをひとつでも開始する。(快のルール)

2. 3つの原則 (1)たとえ健康によいことやよい食べ物でも嫌であれば決してしない。(2)たとえ健康に悪いことでも好きでたまらないか、止められないことはとりあえずそのまま続ける。(3)健康によくてしかも自分がとても好きなことを一つでもよいから始める。

3. 結果ボックスを実行した肥満者の95.4%の人々は、平均して一カ月に3.3kg減少した。総コレステロール値は減少し、HDLコレステロール値は増大した。また、最大酸素摂取量も増加した。リバウンドはなかった。ボックス法におけるバイ・デジタルO-リングテストの有効性と必要性ボックスを実施するにあたって、一番問題となるのは「物」や「事」が心地良いか、不快かということが、一人一人異なるということである。ここに、O-リングテストの応用の第1の意義がある。さらに、O-リングテストによる自己への気付きというもっと重要な意義が存在するが、これらの点について検討した結果を報告する。